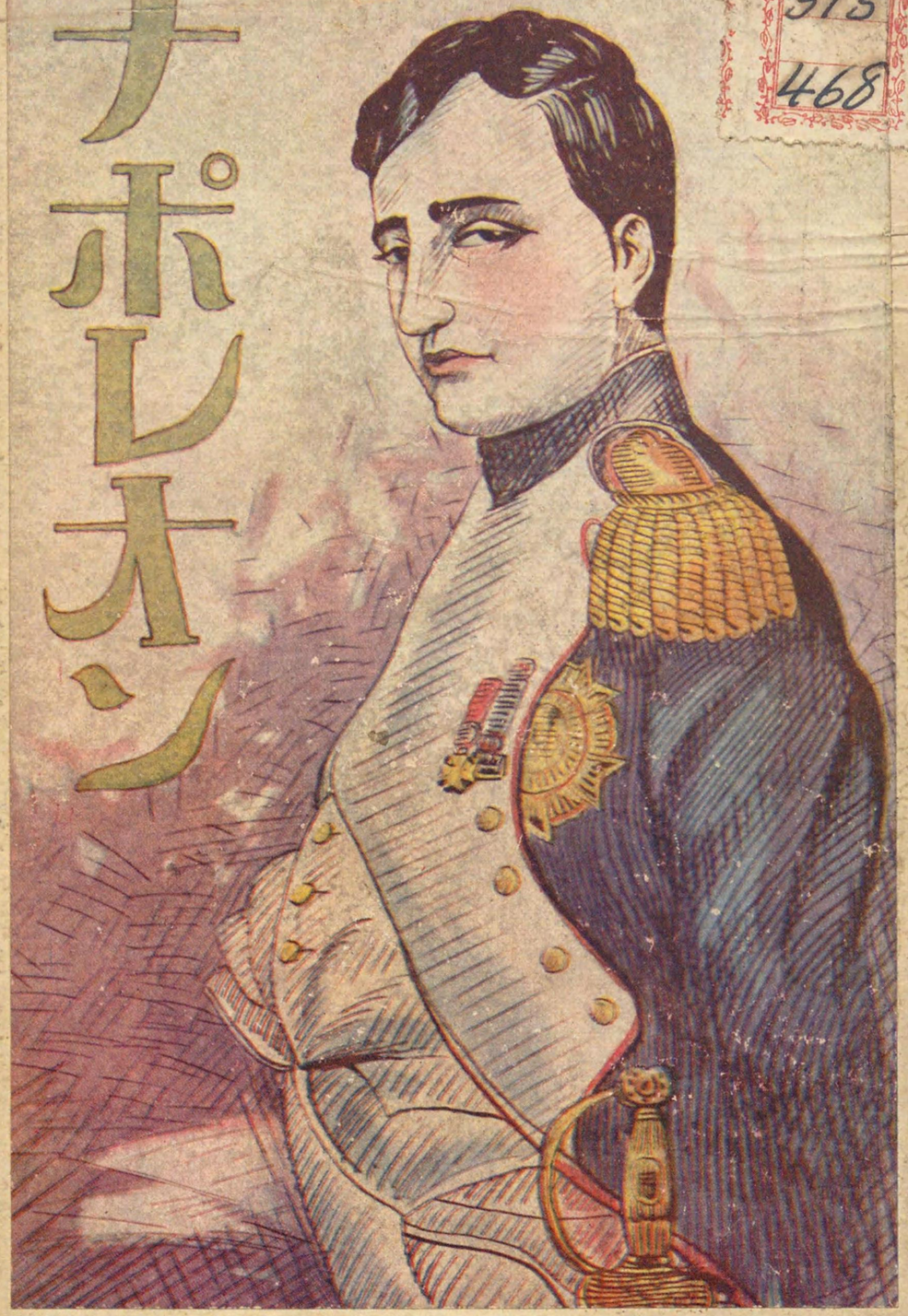
ナポレオン



315
468

ナポレオン

笹山狂浪

昭和三年十一月廿日
帝國圖書館

27
S-2

150621

はしがき

世界の歴史は英雄の傳記なりとは餘りに英雄を過重したるの語なるべし。然り。されど若し世界史上より英雄の事業を除去せんには剩す所そも何物かある。戰爭や。科學や宗教や。哲學や人生の凡てを通じて善く英雄を待つなくして一新紀元を時代に劃し得たるものはあるなし。革命や。維新や。之を爲し。之を遂げ。世界光明の源泉となりたる者。英雄にあらずして將た何物の業ぞ。されば狂熱詩人「バイロン」は嘗て其の「ドン、ブアン」の中に歌ふて曰く「われたゞ覓む一英雄」と。誠や千百の衆愚はたゞ一人の英雄の出現に待つて初めて活くるを得べきなり。吾人今此に「ナポレオン」を傳す。渠は君子に非ず。聖人に非ざるなり。一介「コルシカ」の貧青年。一度風雲に會して「チユイレリー」王宮に人間至尊の顯榮を極め。事敗るゝに及んでは絶海の孤島に怨多き末期を急ぎたる。痛絶なる前半生と。悲慘なる其の末路とは悲壯なる英雄が五十幾年の生涯を飾りて千載多恨の男の兒を泣かしむるを想ふの時。吾人は遂に吾等の英雄「ナポレオン」を棄る能はざるなりき。即ち東邦の姫氏國。漸く多事なるの秋。畢世の英雄を傳して之を江湖に介すると言ふ而已。

譯者識

凡例

△本書は「ナポレオン」の生涯にて最も偉烈にして色彩に富める部分の紹介を主とした、と共に「ジョセフイン」の生涯をも併せて紹介したものである。

△本書の參照した書は北米の文豪「ヘッドレー」氏の「ナポレオン」傳其の他數書である。また「ジョセフイン」の傳は「アボック」氏の傳によつた。

△「ナポレオン」の事業については未だ盡さざる點が多くあるが紙數に限があるので遺憾ながら後日を期することにした。

△本書を著はすに就ては英米史家文士等の一部の偏狹なる毀譽は去つて最も大膽に「ナポレオン」の眞相を紹介するに努めた。

目次

第一　革命の佛蘭西……一
第二　風雲兒の出現……一一
第三　母の敎化……二七
第四　春燕秋雁の怨……四二
第五　窮迫時代……五二
第六　革命とボナパルト家……六〇
第七　蓋世の意氣……六九
第八　情のナポレオン……七八
第九　伊太利遠征……八七
第十　閑臥自適……九五

第十一　埃及征伐……一〇五
第十二　統領時代……一一四
第十三　ナポレオンの經綸……一三〇
第十四　ナポレオンの帝政……一三四
第十五　帝政の沒落……一四七
第十六　百日時代……一五〇
第十七　ナポレオンの末路……一六三
第十八　奈翁の人物及性行……一七三
（一）　蠻人の間に邦を立つ……一七三
（二）　ナポレオンの戰畧……一七九
（三）　ナポレオンの勇悍……一八二
（四）　ナポレオンの雄辯……一八五
（五）　無休息の精神……一八六
（六）　ナポレオンの自信……一九一
（七）　唯一の伴侶……一九七
（八）　ナポレオンの大手腕……一九八
（九）　ナポレオンの仁恤……二〇二
（十）　一生の大瑕瑾……二〇七
第十九　女帝ジョセフイン……二一四

目次（了）

絶世の英雄

新譯ナポレオン

笹山狂浪著

第一　革命のフランス

南歐文藝の復興と共に暗かつた中世の夢を覺まされた人は皆欣然として明るい近世へと途を急いだ。

學藝の復興。　發明。　發見の氣運に伴ふ社會人心の動搖は延いて近世史上の大事變たる獨逸の宗教改革を惹起した。

覺めたる世紀の兒は曩日の制度慣習に慊らない。　どうして積習陋弊に甘んずることが出來ようにに。　人文宗教界の革命は速くも恁うして

行はれてゐる。政治社會的革新が何日までか行はれないで止まう!?自由平等博愛の若々しい芽は萌いてゐる。機雲熟すれば花も咲かう實も結ばう。何れは此の儘に朽つるには惜しき生々しき元氣で日一日と成育してゐる。

恁うした社會の風潮につれて懷疑、破壞の氣習を帶びた學風は起つてきた。「ヴオルテール」の民情論。「モンテスキユー」の萬法精理。ルーソーの人間均權論。民約論などは新時代の先鋒に立つて舊思想。舊信仰。舊制度を呪ふたものである。

人文の灯暗かつた時代には人は昏濁の世界に彷徨てゐたろう。が一度清新なる近世の空氣を吸ふて自由の曙光を仰ぎ視た身には今迄の闇き世界が耐へられない。重い空氣は吸ふに忍びぬ。積弊陋習は際だつて眼に觸れる。抑壓せられてゐる新思想は國民の胸に溢れて危

機は愈々迫つた。

俄然、革命の狼烽は野葡萄芳る「フランス」の天を焦すに至つた。政府の失政。制度の頽廢を挽回するなくして時代風潮の洪流に背戻する強大の王權を支維せし「フランス」が汪溢せる時流氾濫の舞臺となつたのは止むなき自然の反動であつた。

怕るべき革命の慘禍を蒙ッた佛蘭西は如何にして新思想爆發の導火をつくつたか。之については史家の說をなすもの數多ある。けれども時代の警鐘に醒まされたる國民の自覺が專制政府に對する反抗の起因をなしたことは爭はれぬ。

貴族縉徒。跋扈。汚吏貪官。跳梁。苛稅收歛生民の膏血を絞つて不義の豪奢に天下の耳目を聳動せし王朝の權勢。無辜を羅織し、良民を誅求し。民論を壅塞せし當代廟堂、橫暴專制等は溫從なる國民を

して革命に趨らしむるに與つて力あつた。

路易十五世の庸暗、十六世の優柔は迚ても積年の頽勢挽回に耐ゆるの器でない上に貪婪無恥の奸臣俗吏の此に乘じて私利我慾を擅にして私服を肥すを事とし非道の奢侈に耽つて敢て下情を省みない爲めに民人生色なく野に飢餓を叫ぶ者漸く多くなつた、斯樣に財政紊亂生意澁滯した時分に當つて偶々「ツルゴー、チツカー」等の出づるあつても優柔の君は貴族縉流を憚りて忠臣の苦諫を容れないので、國內漸く騷擾を來し民心何となく落付かなくなつた。

「ヴオルテール」「モンテスキユー」「ルーソー」等が危激の著書によつて醒まされたる國民は時しも北米獨立の事相に接して尅上の壯擧に動かされて「フランス」の天地漸く色めいて來た。

國民は今や堪ゆべきだけは耐へ。忍ぶべきを忍んだ。此の上はたゞ

發するの外ない。迂愚なる貴族縉流の徒は未だ貪婪飽くことを知らない。が壓制に耐へ苛稅を忍び默して橫暴苛酷なる朝家の專制に從つて來た國民の胸には抑壓されたる自由の熱火燃ねてゐる。噴火は勢止むを得ない。機は熟した、時は來た。

優柔の王「ルイ」十六世も今は躊躇すべきの秋でない。千七百八十九年五月五日。久しく廢してた國會は召集せられた。

而しながら頑愚度し難き貴族は此の際も「チツカー」の苦衷を容るゝことをせない。「アベシエー」の何謂第三級は公にせられた。「ミラボー伯」は下ツて民黨の領袖となつた、風雲愈々急になつた。

六月十八日になつて平民議院は國民會議と改稱した、事態容易ならないのを見て王の解散を命ずるあるや。「ミラボー伯」は吾等は民意によつて此に在るのだ。新憲法を布かない間は解散をせないといつた。

自由の民は立つた。積年の鬱結せる民心は發した、革命の前には權勢もない。位階もない。兵力遂に何するものぞ。狼烽は上げられた。七月十四日蜂起せる巴里府民は「バスチール」の獄を襲ふて。「フーロンを殺し。「ラファイエット」を國民軍總督とした。三色旗一度巴里城畔に翻るや地方の農民相呼應して蹶起し。殺氣野に市に滿ち充ちて醒風時人の膽を寒からしめた。

多年抑壓されたる自由の熱火發しても革命の狼烽炎々天を焦してまた如何ともせん樣がない、急激峻烈なる熱狂兒が自由の爲めに劍戟を執つて立つ、其の前には破壞と誅求あるのみである。

恁うして天賦人權の宣言は布かれた、新憲法は准可された。そして第一期の革命はなつた、次で列國の忌憚に觸れた革命黨は此處に第二期革命の止むなきに至つたが。連合軍を「ヴルミー」に破つてよりは

意氣天に冲して熱火今にして地上の物皆を燒拂はねばやまぬの概を示した、斯くて第三期の革命に於ては遂に「ルイ」十六世の罪狀を審議して千七百九十三年一月二十一日優柔庸愚の王は斷頭台上に刑死するに至つた。

佛蘭西の王政は亡びた。民黨の意氣は昂つた。革命の勝利の聲は全歐の天地を震愕せしめた。列國民叛亂煽動の檄は飛ばされた。殺氣滿ち腥風荒み天下を擧げて昏亂の巷と化せんとした。恁うして所謂恐怖時代に入つた。鬪爭と刑戮は刦る處に行はれて慘風悲雨人はただ熱狂して革新をこれ急いだ。

「ギロチン」に慊らずして掩殺、溺殺の刑戮法を案出されたのも此の時であつた。誅戮は盛に行はれ慘禍は全國に充滿た。

「テルミドル」の變は漸く國民の疲憊と反省とに起り、腥風慘雨は今

や國民の懶怠を招くに至つた、流血に飽き刑戮に戰ひて國民は慘禍の堪へ難きを想ふに至つた。

流血屠肉百千の犧牲を拂つて贏ち得たる處は尠なかつた。農民は最早や幾年の狂奔に疲れて來た、外列邦との和議ならず、內諸黨の訌爭熄まない。於此益々革新の局を急いだ。

國內諸黨の餘孽相鬩ぎて共和の實果を獲るには遠かつたけれども國民協議の外交が功を奏したので、さしもの慘劇も大團圓に近づいた。

千七百九十三年の憲法を激に過ぐるとして第三年憲法新に定めらるるや地方民は歡喜した。而しながら巴里府民は同胞の血と肉に代ゆる安價なる此の酬に對して默しては居らなかつた。彼等は革命の祭壇に希む所のものを得ざれば尙ほも幾多の犧牲を辭さない意氣を示した。巴里府民は騷いだ。妖雲また佛京を包むだ。此の時。此の

日狂熱の兒「パリー」府民を鎭壓の衝に當つた者は「ナポレオン、ボナパルト」であつた。

「ナポレオン、ボナパルト」は命を奉じて之を鎭撫した、恁うして國民協議の解散と共に六年の動亂は「フランス」王政を覆して共和政と化し。專制の陋を破つて憲法政治となしたが、而し未だ全く內訌外患の絕ねざる此の機に應じて一人の風雲兒「ナポレオン、ボナパルト」立つや「フランス」革命は變じて全歐の大亂となるようになつた。

「ループル」宮庭に八千の士卒を備へて、「セイン」河畔四萬の暴徒を潰走せしめた「ナポレオン」は頓ては三軍の將として全歐の天地を蓆捲し、「チユイレリー」王宮一代の華榮を極めて、「ナポレオン」大帝國を造るに至つた。曠世の雄圖。絕代の偉業　五十二年の風雲兒が生涯に於ける他日雄飛の基礎は此時になつた。「ツーロン」攻擊に於て旅團長とな

つた「ナポレオン」は「パリー」城外一擧にして暴徒を擊退した勳功によつて內國軍司令官となつた。

「フランス」革命の終局は吾等の渴慕する英雄兒が、歐州の天地を飛翔する時である。

絕代の雄畧、曠世の壯圖を胸に抱ける少壯旅團長に對し時の議會は喜んで內國軍司令官の大任を授けた。

革命の機運は既に一轉した。憲政の礎臺は新らしく築かれた。が列國との釁隙は未だ其の局を結ぶに至らない。國民は多年の叛亂に悃憊してゐる。國情は衰頽の極に達してゐる、國も民も今は血に飽き慘禍を厭ふて只管に和平を希んでゐる。工藝廢れ。商農衰へ。信用地を拂ッて業を起さんに由なく資を覓めんに策がない。けれども釁隙未だ局を結ばぬ間は此の衰殘の餘力を糾合しても四强に備へなければならぬ。

此の時に當ッて千百の凡愚が額を鳩めて計策に日を暮らしたとて役にたゝぬ。

英雄兒が出でゝ雄飛すべきの時は來た。「ナポレオン、ボナパルト」は此の際に於て內國軍の司令官である、彼の才、彼の智、彼の膽を以て此の時。此の地位に居る。

蟄龍風雲に會しても尙ほ地中に屈すべきか。非ず。男兒の偉業これよりぞ初まるのである。

第二　風雲兒の出現

國事多端國家多事偏に人材を待つべき時に於て偉大の器を抱いて樞

要の地位を占む。羈足は思ふが儘に伸ばすべし。鵬翼心の儘に張るべしである、幸運の兒ナポレオンは今や風雲を掀翻して全歐の天地を改造すべき地位に立ッた。

が彼も亦一介凡庸の兒として始めは人の女の胎から生れ出たのであつた。

「チュイレリー」宮殿全歐の君主を恐懼せしめた。「ナポレオン」皇帝もれた里を洗へば吾等と同じ貧乏貴族の惡太郎であつたのだ。

古來大人物の生出については多くの奇蹟の如き傳說がある、が吾等の英雄兒「ナポレオン」の生出は夢の如く神秘な奇蹟ではなかつた。彼は世の凡愚と同じく平々凡々の兒として呱々の聲を擧げたのであッた。東の博士禮物を捧げて來る程の榮を荷ふては生れなかつた。

地圖を擴べて眼を刮き地中海の濱、山靑く水白く風温たかなりとき

く伊太利の近海を索ねたならばあるかなきかの「コルシカ」といふ名のみ記憶に新らたなる島がある、其の「コルシカ」の西海岸に「アヤッシオ」といふ商港がある。

丁度紀元千五百二十九年頃に伊太利「タスカニア」の出で「フロレンス」の貴族の遠孫の「フランシスコ、ボナパルト」といふ人が其の「アヤッシオ」港に移り住むだ。其の後其の子孫は島の名族として榮えてゐたが「チャールス。ボナパルト」に至ッて家運漸く傾いてきた。

「チャールス、ボナパルト」は「コルシカ」島の名族である所の「ラモリノ」家の女の「レーチチア。ラモリ」を娶ッて妻とした。「チャールス」は辯護士を業としてゐたが、放逸なる性質は敢て衰頽しゆく家道を挽回せようともせなかつた。二人の間には十三人の小供が出來た、此の多くの小供を敎養する丈けでも並一通りのことではない、其の上に運家

漸く衰へつゝある時である、世の常ならば精力をあげて家庭の幸福繁榮を圖らねばならぬのであるが「チャールス」はそれをするには餘りに性質が放縱に過ぎた。不羈自ら許す「チャールス」は徒らに内を顧念てアクセク稼ぐには適せなかッた。彼は滿身の意氣を捧げで「コルシカ」島の獨立運動の爲めに奔走した。たゞさゑ傾きつゝある家産を擧げて之が爲めに投じてしまッた。

今にして「ボナパルト」家は見る影もない哀れなる貧乏貴族となッてしまッた。榮ゑたりし昔を偲ぶは愚である、十三人の小供を敎育するさへ思ふに任せない有樣となッては、代々の榮譽も何の益にもたゝない、而しながら「チャールス」は依然家道を顧念するの人でない、たゞ其の妻「レーチチア」は世にも珍らしき氣丈の女であつた、良人の放逸なるに引きかへて哀れなる名族の命運を維持するに善く努めた。

才德併せ備へた美しき妻は志士の妻女として善く内を治めた。人の子の母として善く其の責を全ふした、衰頽せる家道を治めて十三人の小供の敎養に意を用ゆる其の勞苦は並大抵でなかッた。否そればかりではない良人の「チャールス」は一家の家長として多くの小供の父として餘りに無責任であッた、放恣徒らに才氣のゆくが儘に振舞ふ良人に事へて一家の整理と小供の敎育に努めた「レーチチア」は實は女丈夫であつた。

我等の英雄兒「ナポレオン」は實に此の熱狂なる……而かもそは南歐人の特質なる一時的狂熱に非常の活動をするも頓ては耐久の努力なくして醒め易き……志士チャールスを父とし。「コルシカ」島無双の美人として才德兼ね備へたる女丈夫を母として貧乏貴族の第二子として生れたのであつた。

時は丁度「コルシカ」の獨立軍「フランス」の兵に敗られて愛國の志士「パオリー」國外に走り、四十幾年「ゼノア」政府の羈絆を脱せようとして多大の犧牲を拂ッた甲斐もなく却ッて今は佛蘭西の屬領となッて多年悃憾の心に苦るしき平和を喜ばねばならぬといふ時分であつた、

「ナポレオン」の父「チャールス」も獨立軍の帷幄に參して盡瘁した。「パオリー」等と共に愛國の志士を驅ッて祖國の爲めに奔走した、而しながら「コルシカ」島の志士が心肝を碎きて幾十年間の苦戰惡鬪も命運の歸する處また如何とも詮樣なく義に殞れ國に殉じた志士の亡魂啾々の怨長く野に迷ふの外なかッた。

「ゼノア」政府は此の島を止むなき事情の爲めに、佛蘭西に賣讓することになッた。「フランス」政府は直ちに大軍を遣はして叛亂の鎮定を企てしめた。

慷慨の熱血胸に燃るてゐても愛國の至誠に苦難は敢て辭せざる丈の大勇猛心あるにしても獨立の叛旗を翻してから幾旬年、意氣古ながらに旺なりとは雖、久しき間の苦鬪に疲憊せる獨立軍の勢力振はない今日、迚ても「フランス」の新手の大軍に敵し得よう筈がない、而しながら一度屈辱を叫んで獨立の叛旗と命運を俱にすべく血を啜つて盟をなした志士は敵はぬまでも血温き限りは戰はずして止まない。

敗るゝとても生命のある間は此の意志を抂るべくもない、が殉國の至誠と意氣を以て戰ふ獨立軍の戰ふ毎に獲る所のものは悃憾と絶望にして、失ふ所は崇き千百の生靈と限りあるの精力、斯くては刻々に自滅すべき外なきを思ふた獨立軍は衰餘の軍を糾合して最後の命運を賭して戰を決した。

斯うして「パオリー」等は「ポントヌオボ」に佛軍を邀へた。

勝敗の數は既に明である、命運の逝く所、一島の前途また如何とも仕方がない、而しながら彼等は努めて戰ふた。

「ナポレオン」の父も「パオリー」等と共に砲煙彈雨の中を驅馳した。彼の母「レーチチア」も其の良人に從ッて志士を勵ました、其の時「レーチチア」は既に姙娠してゐた。常ならぬ身を以て「レーチチア」は戰場に立つた、彼女の胸には祖國を思ふ念と良人の身を氣遣ふ他に何事をも省みる隙がない、纖弱の身を提して能く軍中に士氣を鼓舞した。

「レーチチア」は其の折一人の兵士に向つていつた「吾等の生命は「コルシカ」に捧ぐべきである、吾等は屍を原頭に曝すも悔ゐない、勝つことが出來なければ死ぬばかりである」と

而しながら此の戰に於て「コルシカ」の命運は決せられた。一敗地にまみれてまた立ッ由なくなッた。けれども彼等は未だ死して宿昔の志

に殉するに至らなかッた。

佛軍の勝利と共に志士は多く深山僻村に跡を晦ました。「ナポレオン」の父母も「パオリー」等と共に山を越へ谿を渡ッて身を隱した。

斯うして「コルシカ」の平和は回復された、獨立軍の敗亡と共に長く佛國の屬領となることになッた、否島民は佛國の治下に甘んじて屈從するの外はなかつた。

斯くて其年の恨多き春も晩れた、青葉の山に啼く杜鵑にも殉國の志士が怨み偲ばれて。うらぶれの力なき羽に今日の運命を喘ぐ胡蝶にも昨日の涙がある、屈辱の不平の中に夏も闌けた。

千七百六十九年の八月十五日は「マリア」昇天節會である、涙痕拭いあゑぬ島民は此の日會堂に集ふて哀れなる命運の前途を神に祈ッた。

其の日「レーチチア」も鄉にあッて會堂に詣でた。聖壇の下に跪座して

昨日を偲び今日を思ふて無量の感慨に咽んだ、誠心込めて善男善女と共に祈願を凝らしてたと、其の時「レーチチア」は胎に異常を覺えた彼女は今臨月である。耐へ難き陣痛を忍んで補けられて家に歸ッた門を入ッて寢室に行く間も待ち得ずして玄關に於て「レーチチア」は一人の男の兒を産むだ、其の時赤兒を臥せしめたる絨氈には向ふ所敵なかりし古英雄「シーザー」と「アレキサンダー」の像が畫れてあッたと或る史家は言ふた、而して其の赤兒の運命を豫言せようとしたがレーチチアは之を否定して「當時妾は冬に於てすらかゝる物を所有せなかッたのに盛夏に於て怎奈ものを有てよう理がない」と語つてる。

「ボナパルト」家には俄の出産に上を下へと騒いだ、けれども母子共に健全なのをみて紀念多き節會を嬉びと騒ぎの内に過した、元來「ボナパルト」家には一つの家憲がある。それには二百年來の慣習として第

二番に生れた男兒には必ず「ナポレオン」と命名することになッてゐた。

「ナポレオン」とは希臘語で曠原の獅子を意味する語であつた、(此の名を持ッてる)チャールス」の叔父は母國の爲めに「ヌオブオ」で戰死した)第二男には慣例として此の名をつけてきたのであつた。

今度「マリア」昇天節會に生れた男兒にも彼の父は先例を守ッて「ナポレオン」と命名した。

偶然!?。曠原の獅子王と呼ばれたる、此の赤兒は他日歐州の天地を蓆捲して大帝國を作り其の皇帝となッて獅子王として一度吼號するや列國の君主將相を慄然たらしめた。

吾等の英雄「ナポレオン」は斯くして生れたのである。

世の傳記者の語をかりて言へば彼は其の生れざる前に於て既に不思議なる運命を有ッて居ッた、彼の母は此の英雄兒を胎に孕めるの身

を以て千軍萬馬の中を往來したのであッた。彼佛蘭西皇帝となつての後、母の「レーチチア」は當年を追想して次のようにいつた。

「妾は「ナポレオン」を心臓の下に連れて出陣した、其の喜は其の後彼を膝にして乳を哺ましめたそれと異つたことでない、當時妾の心を攪亂したものは良人と「コルシカ」島との運命であッた、妾は戰報を得んとして危險なる戰線に近づくを辭せなかッたので度々彈丸の耳邊を掠むるのをきいた云々」と

「レーチチア」が戰線に立つて、良人と「コルシカ」島との運命の逝く所を憂慮して彈丸の耳邊を掠むるにも驚かずに戰報の吉左右を待つてる時に其の心臓の下にあッて躍ッてた兒は生れて曠原の獅子と名付けられた、而して彼は禍亂の時代に成長した。

而しながら彼れの出生、彼の幼時について其處に怪しき宿命の存す

るが如く論ずるのは誤りである、冷靜に彼の出現について考へ彼の生涯を吟味したならば或点に於て彼は幸運の兒であつたには違ひないが一部評傳家の言ふ如き神怪なる奇蹟はないのである、彼の生るや世間並であつて彼の幼時は平凡であつた。

傳記者の多くが偉人の生涯を叙するに當ッて誇大なる筆を弄して其の人の半生を修飾せようとするは或意味に於て無理ならぬことかも知れない、けれども其は幼稚なる英雄崇拜の結果であつて歴史に忠なる人の業でないと共に時としては人間の偉大なる名譽を毀疵つけるものである。「ナポレオン」も亦それら史傳家の彩筆に阿曲され修飾されて凡愚が崇拜の祭壇の奥深く祀り上げられようとした。

彼の母胎にあるの間の出來事は其の好材料となつた、彼の生るゝや初めて寢臥された敷物に「シーザー」や「アレキサンダー」の畫像を描いて

あつたといふ如きもそれである。彼の幼時の腕白を以て速くも前途を豫言してゐたかのよう傳へるのもそれである、其他數ふれば多くの神怪なる傳說は彼の半生史を修飾されてある。成功の彩華に眼眩し、勝利の鬨聲に耳聾して戰々恟々として只管に偉人の面影を窺はんとする者の前には燦たる偉人の事業の光榮に輝く其の人の半生は凡て七彩爛として高價の珠玉に包まれてゐるように想はれませう。視るもするだろう、其處で世間並の行爲も逸話となり、平凡なる事蹟も傳說されるのである。「ナポレオン」が顏是なき稚兒の身にて母に抱かれて敎會に行き洗禮を受けんとせし時、神父恭しく立つて手に聖水を掬むで彼を淨めんとするや、紅葉の如き手を振つて之を拒むだとて敢て物珍しいことでもない、頭に水を振りかけられて泣きも喚きもせぬ小供こそ却つて不思議な位で其の小供が眠ッて居るか

病氣なかでない以上泣きもせようし喚きもせよう、が「ナポレオン」に於てのみ之を拒むだとて彼此の時既に此の概ありなどといふに至つては寧ろ奈翁嘆美者の哀れなる心裡を憫まずに居れなくなる。笑ふを止めよ、吾人は敢て言ふのである、「ナポレオン」は神でもない魔でもない、彼は平凡なる人間として生れ、人樣並……寧ろ以下……に育つたのである。

蛇は寸にして人を呑むの氣がある、それが能なら此の氣概あるが。當然である、本能に生きるが人間の能事なら人類もまた生れるとから誰にもそれ丈の氣概はある、啞でも馬鹿でもない小供が泣いたとて不思儀でもなければ貧乏貴族の小供が慘めな服裝をしてゐたのも當然である、學生時代に兵隊パンを好むで喰ふた「ナポレオン」が豪いなら燒芋を頰張る書生は何になる？。

再び言ふ吾等の英雄「ナポレオン」は人間である。

或者はまた彼が學窓の夢は早く既に未來の偉大の事業に驅せ、散策の默想に於て已に曠世の經綸を描いてゐたとて彼に値打付けようとする、薄暗い下宿の二階、風寒い寄宿舍の一隅、果敢ない空想に憧れて夢のような經綸を胸に抱いてゐるもの天下の年少皆然りである。之を要するに彼の出生に奇蹟なく、彼は平凡なる否寧ろ前途に希みの少ない小供として大きくなつたのである。

「ナポレオン」は生れるとから頭ばかり大きくて面に愛嬌のない無愛想な小供であつた、其の上に至ッて剛情で喧嘩好きの手に負へない腕白者であつた、後年「セントペレナ」に於て彼自身に幼時のことを叙べて。

「予は幼時甚だ爭が好きで何人をも何物をも恐れずに或は毆打したり或は負傷せしめたことが度々であつた。けれども予は迅速なる足を有つてたから其の不行跡を母に見咎められたことはなかつた」といつてゐる。彼またれ山の餓鬼大將として青涕垂しの惡太郎に過ぎなかつたのである。と共に前途に望のない剛情ッ張りであつたのだ。然らば此の頑童をして他日天下に名を爲すに至らしめたる所以のものは奈如。吾人は彼が年少時の鋭氣壯心を生涯支持して彼の偉業をなした精力の非凡であつたことを認むると共に彼の幸運は善く之等を銷磨し活用すべき多くの好機を與へたことを思ふのである。がそれよりも「ナポレオン」の生涯に大關係あり。彼の偉業に與つて力あつたものとして見逃すべからざるものは其の母の敎化である。

第三　母の教化

生々とした元氣の善い芽も培はず手入れせずに棄てゝ置けば頓ては雨に風に摧けて終う。培養た樹の花は美しく。心盡して手入れした實は大きい。「コルシカ」の島に野生の巨木は今迄も尠なくなかつた。南歐の溫き風に育つた花は荒凉たる島の歴史を彩つた其の香は地中海の藻鹽の香に飽いた島人の鼻をうッて凋落の床に有情の兒に春を偲ばせるものもあつた。が怨多き平和を喜ぶ「コルシカ」の夏。「マリア」昇天の節會の朝「アヤッシオ」の港近く萌ゑ出でた若芽は世間からして珍重がられる程の香木でもなさそうであつた。成長して蒼空高く伸び枝を四邊に張る巨樹とも思はれなかつた花咲いたとて實が結つたとて落寞たる島の風致を添ゆるにも至らぬだろうと思はれた、其の

望み少ない若芽は培ひ育てられて日一日と伸びた。無格構な技振も丹精込めてたゝ養つた甲斐あッて島には惜しき樹となつた。「フランス」の野に移されて革命の春に遭ふた時「アルプス」の山より高く幹は伸び枝は全歐の天地を覆ふて絶世の珍花は絢爛として咲き不朽の實を結ぶに至ッた、其樹は「レーチチア」といふ巨木であつた。

「ナポレオン」は父に享くる所のもの少なうして、母に負ふ所極めて多かつた、彼嘗て人に告げて「予は全き凡てのものを母上に負ふ」といつた位で他日の成功に與つて力あつたものは母「レーチチア」の教化であつた。「レーチチア」は妻として凡庸の良人を援け、主婦として零落の一家を治め、母として最も子供の教化に勤めた。

「ナポレオン」の父「チャールス」は偉人の父としては、餘りに小さい人物

であつた。或者は偉人の名譽の爲めに其の父をも大なるものにせようとする。けれども「チャールス」は一部傳記者の言ふ如き高價なる人物ではなかつた。

嘗ては「コルシカ」の獨立軍の爲めに非常に盡した。「パオリー」等を援けて祖國の榮譽に身を殉せんとまでした。が一度「ポントヌオブオ」に敗るゝや彼の心は動いた。「パオリー」等と一時身を隱して機を待つことにはしたが事非にして獨立軍の命運の決せらるゝと共に「チャールス」の狂熱は冷めた、春を怨み、秋に泣く憂國の志士の涙を餘所に陰に形勢の趨く所を窺つた、彼は野心の爲めに節を屈し恥を忍びて名と地位に走つた。「チャールス」は劍を棄てゝ「フランス」の軍門に降つた。男兒意氣を棄つ。採る所のものは何!?、凡て零である、志士盟に背向く、恥辱之より大なるはない、意氣を棄て盟を破つて、男兒五十

年の生命を惜しむ、痴愚之より甚だしきはない　銀錢一握紫綬一條、たゞ是が爲めに友を售つた「チャールス」は意氣の兒でない、義の友でない。昨日血を啜つて盟を約し、今日節を屈して汚濁に獨立の叛旗を染むる無恥の男子は八ツ裂きにも爲てもやりたい。同胞の怨を捨てゝ名に就き富に趨り安樂と榮譽を願ふ無節操漢に齡してたかと思へば昨日迄の自分の狂熱が怨めしい、自分達の義心を蹂躙されたように腹がたつ。「コルシカ」の志士は「チャールス」の變節を憤懣した、此の腐膓漢を寸斷に裂きても飽かぬ程に激昂した、否そればかりでない、鳶には惜しき鷹の兒の「ナポレオン」も物心ついての后は父の無恥なる行爲を怨むだ。

而しながら權勢を追ふて走る「チャールス」の前には恥もない、義もない、意氣もない、區々たる小島に意地よ自由よと驕ぐ正直者の諫言

は耳にも入らぬ。「チャールス」は其邊に於て利巧であつた、小才の利く男であつた、泣いたとて騒いだとて太いものと何やらには卷かれよの譬、今にして自由も獨立もあつたものでない、形勢の傾く所早くも見てとつた「チャールス」は時流に棹して安樂の彼岸に友の迂愚を笑ふ丈の才氣があつた、チャールスは敬虔の念に欠けて居つたと同じように信義の念に乏しかつた、惰弱は彼の本性であつた。逸樂は彼の生命であつた、其等の前には義もない恥もない男兒の意氣は覓めんとする丈が迂であつた、彼には學問があつたが其の學問は無恥非廉の小才氣を補けて彼を岐路に導いた外に何の効をもなさなかつた。

「チャールス」は「フランス」の軍門に降ると共に才子一流の籠絡手段を執つた。彼は「フランス」要路の人知事「マルボエーフ」伯を自家藥籠中のも

のとしてしまつた。伯の推擧によつて「コルシカ」島守の顧問官となり貴族院議員となり島の全權を掌握せる十二人會の一員を兼ね遂には島より派せらるゝ佛國駐劄公使と迄なつた。

「レーチチア」は其の影に添ふて良人を援けた。「マルボエーフ」伯は「レーチチア」によつて籠絡されてゐたのは事實らしい。若き美しき人の妻が花唇を洩るゝ甘き言葉は伯をして「チャールス」を推擧せしむるに與つて力あるものであつた。されば「レーチチア」の當時の遣り口については兎角の批難がある。けれども妻としての「レーチチア」は善く凡庸の良人を援けたものである。

「チャールス」は依然惰弱である、娯樂は唯一の目的である。家も妻も子女も省みないで遊蕩逸樂に耽つてゐる、財政は日一日と困難になる、子供の背丈は伸びて來る、教養の費用も嵩んで來る。家政の心

配と共に小供の前途も氣にかゝる、それを女の身一つに引き受けて捌いてゆくレーチチアの胸は切なかつたに違ひない、苦るしい想を打ちあけて良人の智慧をかりようとしても「チャールス」は怎奈事には耳も假さぬ。「レーチチア」が「マルボエーフ」伯を籠絡して小供の教育に便宜を得ようとしたのも無理からぬ。子を思ふは誰しも同じ親心の恥も名譽も棄てた者でも可愛小供丈は世間並に人から爪彈きされぬようにしてやりたいは山々である、天下晴れて腕白もさしたい、友から羨まれるように勉强もさしてやりたい、母の心になつてみればドンな苦勞をしてなりとも小供に慘めな目はさしたくない、不自由させば卑しい心も起しはせぬかと氣にかゝる、が小供がどうなろうと家がどうなろうと一向にかまいなしの「チャールス」は思ひ惱むで窶れるまで苦勞に細る「レーチチア」を慰めてやろうともせな勵ましもせ

ぬ。偶々優しい一言や二言きかされたとて輕薄な男のわ世辭なら嬉しくもない。

良人ながらも不甲斐ないのに腹もたつたろう、餘りの放逸な暮が怨めしくも思はれたろうが、嘗ては砲煙彈雨の間を馳驅した程の女丈夫だ、女ながらも氣骨がある。「マルボエーフ」伯を說いて長男「ジョセフ」を「アウソン」高等學校に。次子「ナポレオン」を「ブリエンヌ」兵學校に何れも無月謝で學ばすことにした。元より伯の周旋で萬事萬端都合よく捗つたのである、其の裡面には美しい若い人の妻の世話に窶れた姿が見る、恁奈具合であつてみれば其の前とても子女の教育は身一ッでやつて來た。かうして母の感化は非常であつた。

「レーチチア」は實に賢妻であつた良母であッた。良人が恃みがたない人物であつたから勢一家の家長となつて權を振ふた、凡てに對して

は嚴肅に振舞ふた。家政既に前にも記したように良人の遊惰に傾け盡されてみれば止むなき場合の外は人からも客嗇といはれる迄に節約した。「レーチチア」は「コルシカ」嶋の名族「ラモリノ」家の女であつたが田舍育ちのお姫樣だ、文學の智識などは皆目なかつた、社會の風習などにも迂遠なものであつた、が意志の強い、思慮に富むだ、利巧な女だつたから何地へ出しても恥かしくはなかつた、其の上に艱難に逢ふ毎度に不撓の精神益々堅く善く凡ての憂苦に打ち勝つた。

「ナポレオン」は母について「損夫、飢渴、疲勞……母は悉く之に忍び之を耐へた、母は婦人の肩の上に男兒の頭首を載せた者である」といつてをる、長男「ヨセフ」も「予の母は强壯にして善良なる人なりき如何に吾等は母に負ふ所あるかよ、唯に好模範たるのみならず種々のものを與へられたり、實に世の母たる人の中にて最も優れたる母、

なり」といつてをる。「ナポレオン」も之と同じことを語つたことがある「予は幾多の眞理と好模範とを母より授けられたり」といつてゐる、兄弟とも母に負ふ所の大なるを言明して居る、實に彼女は世の母たる人の中にて最も優れたる母であつた。

「ナポレオン」が「セントヘレナ」に病める一夕、側なる醫師に向つて「汝はよく看護す、予の苦痛を少しなりとも輕減せば何物をも與へん、何物を以て母の憂慮を償ふに足らざるなり、あゝ愛しき母よ」といつて雲山幾百里母國の佗住に孤島の愛兒を思ふて泣く母を悲しむだのを見ても如何に其の教化の大なりしかも知れる。

而しながら斯く迄其の兒等に深く印象を與へ大なる教化をなした「レーチチア」の小供に對する教育法は非常に嚴格なものであつた。

世間に所謂後家育ち何とかと女一人の手塩にかけて甘く育てるよう

なことはなかつた奈翁が、母は嚴格にして牴犢の愛をなさず、公正に善を勸め惡を懲したり」といたつのは善く「レーチチア」の敎育法を現はしてゐる。

彼女は家庭敎育に於て最も嚴正に勸善懲惡に意を用ひた、苟にも彼女の前に惡と見なされたる行爲に對しては其の兒が眞に改悛の色を現はす迄假借する所なく譴責した。父なる人の無頓着なるに對して母たる彼女は餘りに其の子女に對して嚴肅であつた。而しながら母としての「レーチチア」に牴犢の愛なきが如く見えたのは彼女が放縱なる良人に代つて家長の地位に立つて凡てを采配せなければならなかつたのと女親の常として情に流れ易く斯くては迚も敎育などといふ事思ひもよらざるを悟つて故意に兒等に對しては權威を持して示導の任に當つたのである。「レーチチア」を以て其の兒に冷酷なりしが如

く論ずるは謬りである、彼女の念頭を離れないものは其の良人の身の上と多くの小供の前途であつた。「レーチチア」の胸を傷むるものは小供を敎導の効果の如奈にあつた。

「レーチチア」は熱心なる「カソリック」敎徒であつた。日々に會堂に詣で淨念祈願に餘念なかつたものであつたが、小供の敎育に腐心するようになつてはソレさるも廢した。彼女は。

「妾が家に居らなければ小供を敎ふることが出來ないのである、毎日敎會に出席するのは信徒のせなければならない義務だとは知つて居る、けれども一家の主婦たる者は日々の參拜を要せない、若しか毎日參拜して家庭に於ける子女の敎育を忽諸にするようなことがあつたら却つて神樣の御意に乖くものである」

といつて、如何に其の敎育に重きを置いたかを語つてゐる。

「レーチチア」は實に寺院に毎日の參拜を廢して迄も小供の教導に努めた。而しながら之は決して「レーチチア」の信仰が冷めたからではない。彼女の信仰は依然として燃ゑてゐる、たゞ小供を善に導く爲めには日々の禮拜は怠るとも不信でないと考へたからである、だから日曜には多くの小供と共に會堂の門を潜つたものだ。「ナポレオン」が幼時教會へは行くまいとして常に拒むのを或は叱り或は慊して無理に會堂に伴つた如き、彼女の宗教心を偲ばせる。

恁うして「レーチチア」は其の兒の教化に努め、深い〳〵印象を小供に與へた、其後「チャールス」が「ナポレオン」の劍は列國の君主を戰かして世界に大變化を起すだろう」といつて胃癌で死んでからは弱き女の身で零落の家を支持して小供を養育せねばならんかつた苦勞は並大抵でなかつた。

「ナポレオン」は此の母に負ふ所が多かつた、「ナポレオン」の念頭を常に離れなかつたのは勞苦に窶れた其の母であつた。彼は多くの事件を母に計つて後に決行した、狷介不羈早くから世と相容れなかつた「ナポレオン」の影に添ひ前に立ち導き勵ましたものは此の母であつた。此の母の感化は實に偉大なもので其の教訓は兒等の深く肝銘して忘れざる所となつた。「ナポレオン」が「ブリエンヌ」兵學校に居つた時に些々たる過失より一教官の懲戒する所となるや「母よ、吾愛する母よ御身は嘗て予に人の前に屈する勿れ、たゞ神にのみ叩頭せよと教へ給ひしよ」と身を慄はして叫んだ如き、彼が如奈に此の母を信賴し母の教訓を深く銘じてゐたかを証して餘りあるものである。

曠世の雄傑「ナポレオン」に對して忠實にして眞摯なる傳記者たらんとするものは彼の事業、彼の成功、彼の生涯を通じて凡ての事蹟の半

面には此の母あることを忘てはならぬ。

第四　春燕秋雁の怨

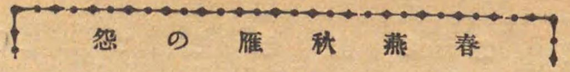
「ナポレオン」は天性既に剛情ッ張りの腕白者、仲々に手に負へない頑童であつた、負け嫌ひの意地の強い小供であつた、母の薫陶を享けて其の長所は日一日と發達した、高慢で自負心の強い感情の鋭い「ナポレオン」は不撓不屈の精神と努力勤勉の良習慣を母によつて與へられた、彼は數學に趣味を有つてゐた、而し其の他の學科に對しては全く望みの少ない小供であつた、母は此の嗜好のある所を知つて彼の長所を啓發するに努めた、と共に用捨なく惡を懲らした。

「ナポレオン」は恁うして十歳になる迄は、父母の膝下にあつて薫陶を

享けた、母は此の間に深く〳〵此の兒の頭腦に何物をか打ち込むだ。彼は「マルボエーフ」伯の周旋で「ブリエンヌ」兵學校に無月謝で學ぶことになつた。「アヤッシオ」の港の腕白小僧は「フランス」貴族の子弟と共に「ブリエンヌ」の兵學校に今日からは起臥することになつた。

學友の多くは「フランス」の貴族の子弟である、其の中に獨り「ナポレオン」は屬領の名族の子弟として互して行かなならぬ、負けぬ氣の彼にとつては母國の微弱なる勢力が如何にも肩身狹く思はれてならぬ。其の上彼は「マルボエーフ」伯の幹旋で無月謝で入學を許されてゐる。たゞさゑ肩身の狹い上に御慈悲にあづかつて來てゐるのだと思へば情ない、學友の多くは威張り散らす、肩で風を切つて歩るく、彼の前では特更らに横柄に構へて見せる、それが癪に觸つてならぬ、せめて學費を滿足に仕送つてでも呉れたなら何とかなるだろうにとも

ふ、けれども「ナポレオン」の父は家財を無くして終つてゐる。母は其の兒の氣象を知つてゐる、「ナポレオン」の心中を察せぬでない、ならば兒よりも母の方が切なく情ない思ひを脱して應揚に勉强さしてやりたいは山々である、父「チャールス」の心柄からとはいへ之も時世時節なら仕方がない、彼には兄弟が澤山ある、母は旅の兒を思はぬでないけれど膝下に殘れる頑是ない兒の教育にも追はれねばならぬ元來が田舍育ちの「ナポレオン」の風采は上がらぬ、其の上に心の儘に母の手の届きかねる「ナポレオン」の風姿ッたらない、其の態度はそれでゐて何處迄も高慢である、口善惡ない學友の「フランス」人は小癪な田舍者を默つて棄てゝは置かない、片意地な屬領の子僧を氣の毒に思ふ程親切な者は一人も居らぬ、誰も彼も一樣に「ナポレオン」を見て



は笑ふ、其の笑ひ方が氣に喰はぬ、彼が鋭い眼で睨むと袖引き合ふ

て何やら囁りながらまた笑ふ、彼が一言何か言ふと其の國訛りがた可笑ひとてまた笑ふ、陰口たゝくのをきいて居れば屬領の貧乏貴族の坊ン〇ちよといつてゐる、た慈悲で來てゐるなら音無しくしてをれと言はぬばかりの仕打ちをする。そうでなくても自負心の强い「ナポレオン」だ。餘りの腹立たしさに幾度か小さい腕を扼して嘆いた、情ない、苦るしい、たの〇れ〇〇〇〇と心の中では叫んで見ても何とするにも仕方がない、怨を呑むでの心抱は感情の慧敏い彼の身にとり死よりも悲いことであつた、時には逃げて歸ろうかとも思つた、が故山の母の辛勞を思ふと張り詰めた心も折れて冷たい學窓の風に慄へて嘆く外はなかつた。どうしても一人前に出世して母上を慰めねばならぬと思ふと如何なる心抱もせなならぬ、儘よ何とでも言ふ奴は言はして置いて今に目に物見せて吳れるはと思ひ直して居りはしても

現在目前での人もなげなる振舞を爲向けられるとカッと頭が上せて來る、振り上げた拳に私と氣がついて下す時の無念さ殘念さ、ヱヽ、是れ程に腑甲斐なしでは無かつたにと思ふて見ても益たゝぬ、貧乏屈辱、弱者、アヽ何故に父上は「フランス」なんかに降つただろう、母國の志士はどうして獨立軍の意氣を見せなかつたのだろう、恨めしいは父上の御身持ち、齒搔ゆいのは母國の志士の意氣地無さ、金もほしい、權利もほしい、毆りたほすは易い奴等にも金なければこそ侮られる、出來ない奴にも國弱ければからかわれる、情ない、恁奈ことなら勉强はしたくない、士官にもなりたくない、此處ばかりが住處と定つた筈のものぢやなし、明日から勞働者の仲間入りしてもたとへ如何樣の辛勞したとても恁うして恥をうけてるよりは何んぼう自由が戀しいやら……と血涙を絞つて心に嘆いた「ナポレオン」は戰、

く手にペンを走らせてインクの跡も滲み勝ちなる手紙に耐へ難き怨恨の程を認めて父に送つた。どうせ許されようとは思つてない。母、の心を傷むることも知つてゐるが、思ひ餘つた殘念さはツイ筆に言はして棄て處のない此の涙、遣り塲所のない此の怨を故鄕の父母に訴へたのだ。

冷たきは旅の風だ、なつかしきは故山の風物だ、況んや昨日迄は腕白大將で我儘してゐた頑童が、今日此の辱しめに遭ふのだもの、「ナポレオン」の小さい胸は搔きむしらるゝより切なく、怨は骨髓に迄も徹するように思はれたろう、腹立たしさと殘念さに無念の涙が込み上げて來る、泣いたら友に嘲笑されるにきまつてる、なんの泣くまい、涙は流すまいと思つてゐても恨の耐へ難さに身躰が慄へて涙は思はず溢れ出る、それを意地と我慢で押し包むで人目離れた物陰で

心の限り泣くこともある、恁うして「ナポレオン」は益々學友と疎くなつて大勢の中に孤立の姿、いつも獨りぽつちで押し通した。がそうした中にたゞ一人哀れなる屬領の少年に友となり味方となつて同情した「ブーリエン」といふ學友があつた。「ナポレオン」は此の時は「フランス」人の嘲笑が骨髓に徹したものとみゑて、「ブーリエン」に向つて時々「予は能ふ限り迫害を「フランス」人に與へん」といつてゐた、學科も出來ぬに金が有るとて意張る「フランス」人、力もないのに自國の勢を恃むで誇る「フランス」人は彼の爲めには最も憎い仇であつた、何日かは此の恨み報ひんものとの念は深く心肝に泌み渡つてた。彼はたゞ一人「ブーリエン」と交遊する外敢て交りを欲せなかつた。と共に彼は多くの時間を讀書した、他の學友が遊戯に餘念のない時分に彼は友なき孤寂の身を圖書館の一隅に在つて讀書に慰めた。學友「ブーリエン」は其の備忘錄に記して當時の「ナポレオン」は面眞目にして沈默。安りに語らず、勤勉にして交遊せざりき」といつてをる、よしんば彼が多くの屈辱と嘲笑を受けなかつたにしても彼の性質はどうせ輕佻なる「フランス」貴族の子弟と相容れない、それが前記のような次第だから「ナポレオン」は憤りも恨みも棄てゝ只管に讀書に耽溺した、彼は多くの歷史書を讀むだ、傳記類を繙いた、地理を諳誦した。數學は元來趣味を持つてたのだから研究は段々進歩んだ。「ゴルターク」。「プラトー」。「キケロ」。「コルヲリウス」などの書は彼が繰り返してよく讀むだものであつた。

英雄譚や偉人の史傳は喜んで讀むだ、戰爭の記錄は注意して繙いた拉下語や佛蘭西文典などの沒趣味な課業は習つてからが何の利益もないといふので碌に學ばうともせなかつた。

「ナポレオン」は力ある古への傑人が花々しき生涯を夢みては、孤寂の哀怨に咽んだ小さき胸を幾度も躍らすのであつた、光榮ある戰史を繰り返して見ては腕をたゝいて快哉を叫ぶのであつた、斯うして彼は學友の嘲罵も、學窓の冷たき風をも忘れ果てゝ勇ましき歴史の頁を辿つて夢は常に古英雄の側に馳せてゐたのだ、が南歐の空澄み渡る秋の夕。蒼き月光に漂零の痩軀を曝らして寄宿舍の庭園を徨彷た時、喞々の蛩韻に果敢ない空想の夢を醒まされた時には遑がに父や母、や零落の暗き家山の偲ばれて不覺の涙なき能はぬのであつた。風温き「フランス」の春、露輝く夕、落花の窓に身を寄せては思は遠く「アヤッシオ」の繪に見るような父母の家に馳せて胸の痞を覺ゆるのであつた。

青春の空想に胸をうち腕をたゝいて騷いでゐても冷たき旅の風、怨

み多き異域の雨、小さき袂に人の世の哀を誘ふの時、彼も有情の人の兒なれば春燕秋雁の怨を家郷に寄せて自らの現世を果敢なむだ。

斯うしてる間にも月日はたつて、「ナポレオン」が「ブリエンヌ」の兵學校に來てからは早くも五年たつた、千七百八十四年には選ばれて彼は「ブリエンヌ」兵學校より「パリー」の兵學校に轉ずることになつた。

「パリー」の兵學校に於ける一ヶ年も彼は依然として狷介不羈、「フランス」人の前に膝を屈することはせなかつた、彼は嘗ていつたように人の前に屈すれ勿れ、たゞ神にのみ叩頭せよとの母の教訓を嚴守して假りにも他人の前に自らを屈して媚ぶるなどのことをせなかつた。

「ナポレオン」に對する學友「フランス」人の態度の暴慢は、彼をして祖國の獨立を痛切に感ぜしむる大なる起因をなした、彼の怨みは頓て今日の「コルシカ」島民の怨みであると思ふの時、彼は母國の救濟策につ

いて頭を惱まさずに居れなかつた。

千七百八十五年十月……其の年の二月二十二日の午後七時に彼の父「チャーレス」は三十九歳を一期として胃癌で死んだ……には「ナポレオン」は砲兵少尉となつて「フランス」駐屯の「ラフェール」聯隊附を命ぜられ其處で當年十七歳の年少士官は軍務に服役することになつた。

第五　窮迫時代

歳月夢と逝きて吾も世も變り果てた時には曩の日の憂しと思ひしことさへも却つて戀しい、なつかしい、「ブリエンヌ」に出てからは學窓の夢なり難き夜々の想は遠く故山に馳せて母が慈愛の鞭撻の何となう戀しくて耐らなかつた「ナポレオン」も、「パリー」に行きてはたゞ一人

の友「ブーエント」と迭に世を慨した「ブリエンヌ」の學窓がなつかしかつた、その巴里にも居る一年、宿志漸く緒について年少士官となつて見れば不自由勝ちでも生活の重きくびきをしらなかつた學生時代のなつかしさに處世の險難を喘ぐのであつた。

今日よりの彼は食も衣も豐かならぬ其の所得で自辨して行かなならぬ苦るしさは遑に昨日迄の冷かなりし學舍の風の肌に悲らきそれにもまして切ないのであつた。

父上逝きまして家山の母は、女の弱き手一ッに零落の一家を引き受けて多くの小供を敎養の任に當つて居られることなれば。今更らに一厘の仕送りも願へるぢやなし。あわれ仕官の喜びの胸に曇らすものは差づめ明日の衣食の手段であつた。聯隊附となつた日も制服一着つくる金がない。一足の新らしき靴を買ふにも破れ「ジャケット」の衣

嚢には餘裕のあろう筈がない、彼は仕立屋の主人に逢ふて神より外に屈せざる筈の頭を下げて借りにて服を仕立て貰つた、一着の服を作るにも恁うした恥を忍び一足の靴をもとめるにも西東驅け歩るいて、やつと身裝を整へた哀れなる年少士官の俸給は年に積つて五十磅に足らないのである、彼には友といふ友もなかつたから社交の何のといふ費用は要なかつたらうけれども一人前になつて世に出りや不要ないようでも要るのは金である、それに「ナポレオン」には母があ る弟がある、淋しい家山の生活向きを思へば誼に厚い彼は此の僅かなる收入の幾部は母に仕送つた、故山の母も幾年の困苦に世態の辛酸は嘗めて居る、可愛い小供が母を思ふて無けなしの金を節して送つて呉れたのを受取るときは優しい其の心根の嬉しくも亦あわれになつて如何な女丈夫の「レーチチア」でも、ア、時世ならの愚痴も出た

ろう、嬉しきにつけ悲しきにつけ先立つは涙の外なき佗びしい當時の「ボナパルト」家に希みの縷と頼まれる「ナポレオン」は實に窮乏の耐へらるゝ丈は堪へた、が道がの彼も或時は此の悃しさに耐へるよりは死んだがきしだとの考も起るのであつた。

何をいつても十七の少年である、其の身は既に生活の苦るしき重荷に息もたへ〳〵に喘ぐのだもの涙の夢に故郷を偲びて死の平和を希むだのも無理からぬ、が樂しみもない此の苦勞の間にも家を思へば之ではならぬと氣をとりなほして勉强もすれば働きもした、十時に寢て四時に起き終日働いた「ナポレオン」の其の頃の努力の貴さは確かに後代青年の龜鑑といつてよい、恁うした不斷の勤勉努力によつて贏ち得たる後代の彼の事業は實に光榮なる高貴のものであつた。

十七の年少士官は窮迫の一年を艱苦の中に送つた、彼如何に强氣な

りとも處世の難衝に立ちては逡巡幾度か絶望の叫びを發せざるを得なかつた、人は當時の彼を稱して曠世の雄圖を抱ける「ナポレオン」の前には生活上の區々たる痛苦位は何の造作もなく切り抜けることが出來たとようにいふ、が人一倍感情の鋭い彼の前には其の折の苦難は實に堪へ難い惻痛を覺ねしめるのであつた、「ナポレオン」には熱い涙がある、紅い血が溢れてゐる、十歳にして人情の輕薄に泣き、十七にして世路の難關を辿るのだもの、彼が生活の重荷に耐へずして人世の荒寞たる淋しさに熟々と感じたとき、蒼白き冥府の灯を望むで絶望の暗路に迷ひ込み、遙かに平安の死の床へ急がうとしたに不思議はない、有情の兒、「ナポレオン」は此處でも是等の惱みと悶へを忘るゝ爲めに讀書をした、彼は圖書館に於て公務以外の時間の多くを費した。

千七百八十六年、「ナポレオン」は暇を乞て故山に省した。

故山に背向いて七年、父に伴はれ母に見送られて初めて家庭の溫かき懷から脫して冷たい人情の風波に棹したのが十歳の時であつた。

それより學窓の六年は隨分と切ない月日であつたが去年學舍を出てからの勞苦はまた一通でなかつた、なつかしの母や弟や何れ吾が窶れを七年の旅の明け暮れ無情なかりし異境に慣れぬ風土の食に水に不自由勝ちなりし故とや思し召さんも、變る風土の住心地は一年たゝぬ内に慣れもすれ、知らぬ人情の寒風も母が眞心込めし破れ衣の襟かき合はして凌げば浮世の冬も知らで過ごすを得もしたれ、何地行くとも變らぬは世路の嶮難、生活の重荷背負ふて去年の秋よりの苦勞苦心、烈しい浮世路の雨風に生命と賴む希望の光明ともすれば明滅して絶望の斷崖に危くも迷ひ行かんとせしこと幾度、其の都度

に額に殖ゑた經苦の皺、何れ涙に汚れた母も兒も兄も弟も健全なる今日の喜に迭に握る手は戰いて先だつは涙であつた。

故山の風物舊に依つて變らぬけれど偖ても變り果てたは我が家である、涙片手に吾れを見送り吳れし母上は昨日に變らぬ温かき愛の御手に錦を飾る十七の年少士官を抱き迎へて優しき言葉に勞はり吳るゝも其の日旅に伴ひ給ふた父は在さぬ、兄の「ジョセフ」は業を卒へて歸つてゐたが之とても母を助けて幾年の勞苦の痕は面に讀まれる。

が母も兄も弟も「ナポレオン」の歸省したのを心から喜んで迎へた、特に母は腕白盛りの頑童を旅に出す日の悲しさに引きかへて佗びしき今日此の頃の一家に錦を飾つて歸つてきた男々しき「ナポレオン」の姿を見て言ひ知れぬ嬉しさ喜ばしさに泣く外なかつた、兄の「ヨセフ」にしても勇ましい弟の歸來の嬉しいにつけても自分の「フランス」に於け

る悲らかりし其の折のかれこれ思ひ出しては「ナポレオン」のいじらしく、見るからに不格構なる其の服裝見るにつけても近所隣の誰彼が口善惡なき噂の端に「ボナパルト」家の惡太郎さま「フランス」歸りと言ふけれどアノマア身裝は何だろう、あれで士官さまも何とか彼とかといつてをるのが心うく此處でも世が世ならの愚痴が出たろう、而し世はとまれ人は如何に評しても「ボナパルト」家は其の日から何となう賑やかになつたに違ひない、兎が長靴をはいたよう。テモマア珍らしい不格構なあの風姿で、よくも平氣で歸られたなどゝ人の憂苦を他所にして心の中も察せずに口八ケ間敷噂せられる「ナポレオン」の鞄の中には常ならば土産物を滿たすべき歸省の日にも詰められたるは彼がなけなしの金にて求めた多くの書籍であつた。

彼は如何なる場合に於ても暇さゑあれば讀書するのであつた、彼は

故山に於ける一年を持ち歸つた多くの書物の閲讀に費した、彼は「ルーソー」に憧れた、彼は軍事以外政治書も讀むだ、文學書も讀むだ。哲學書をも繙いた、彼が或時は文筆を劍にかへんとしたるが如き實に恁うした徑路から來たのであつた。

斯くて一年の餘を家に在つて「ナポレオン」は再び聯隊に歸任し「オーゾン」に駐屯して軍務に服することになつた。

第六　革命とボナパルト家

一年を家鄕に送つた「ナポレオン」は再び聯隊「ラフエール」附となつて「オーゾン」に於て軍務に服してゐた、彼は何地に行きても讀書の人であつた、多くの書籍は彼が唯一の朋友であり慰藉であり戀人であつた。

恁うして「ナポレオン」が窮迫と困乏とに耐へて孜々として修養に努めてゐる間に時代は日一日と遷つて行つて「フランス」の天地は何となく騷がしくなつた、北米獨立の飛報頻に至つて民心漸く動搖をして來た、時の「フランス」王「ルイ」十六世は一度貴族の意嚮を慮りて罷めたる「チツカー」を官に復して失政回復を計つた。が野に革命を叫ぶ聲高くなつては時已に遲い、王は危機愈々迫れるに驚いて民心を收攬せようと焦つた、千七百八十九年五月五日「チツカー」の言を納れて千六百十四年以來廢せられし國會を召集した。「フランス」革命の動機は茲に起り積年の鬱結せる自由思想は恁うして爆發の時機を早められた、其の年の六月十八日平民議院が自ら改稱して國民會議と呼ぶに至つて「ルイ」十六世の狼狽は一通でなかつた、驚き怕れた王は外兵四萬を徵して人心を鎮壓せんとした。「チツカー」をばまたも斥けて代ゆるに

「フーロン」を以てした、國民の忿怒は頂上に達した、七月十四日に巴里府民は蜂起して「バスチール」の牢獄を襲ふた、「フーロン」を慘殺した。「バスチール」獄の鍵は國民軍總督「ラファイエット」の手より「ワシントン」に送られた、「アメリカ」主義は「バスチール」を開けりとは當時國民の聲であつた、三色旗「パリー」城畔に飜るや地方農民は蹶起して暴動は到る所に慘劇を演じた、獄を破り、城砦を襲ひ、貴族を脅かし、醜惡を根底より盡滅せざれば止まざるの勢を示した、此の時此の波動が「オーゾン」にのみ及ばずには居らない、三色旗を望み見た地方不平兒の一揆は此處にも慘虐を擅にして破壞と弑虐は盛に行はれた。當時駐屯の「ラフエール」聯隊の兵士にも暴民を助けて革命の成功を祈る者多く、平常の不平を彼等と共に洩らすに至つた。斯くて八月二十六日天賦人權の宣言は布かれ、新憲法は准可され舊

制は多く打破して第一期革命なつた。が一度動亂の巷と化した「フランス」の民心は仲々に落ち付かない、均しく不平を抱いて立ち共に積憤を暴力に訴へてやつた、革命黨にも「ジアコビン」、「コルドリエー」、「フイヤン」の三派生じて各々其の主義のある所に向つて進むだので、愈々國内は混沌たる有樣となつた、新政布かれて王威地に墮ちた時は勢ひ革命黨の内訌をみざるを得なかつた。一揆起れりの報に接して身を國外に逃れたる「フランス」亡命の貴族を引見して列國帝王の威信に關する佛民の、暴擧を武を以て鎭めんと誓ひし獨乙は「フランス」三世即位と共に第一聯合軍を「フランス」國境に進めた、墺普八萬の合從軍が武を以て「パリー」府民を威嚇するに逢ふや國民の激憤は一時に發して慘禍再び國内に遍いた。

「マルセイユ」の衆五千、愛國の歌を奏して「パリー」に入つたも此の時で

ある、三千の王黨禍に遭ひ難に殪れたのも此の時である、九月の誅殺は斯くて行はれ。「ヴルモー」に連合軍を破つて國民の意氣天に冲した。革命黨は今は「フランス」一國に自由を叫ぶ丈では止まなくなつた檄を飛ばして列國不平の民に聲明して苟くも現代專横なる政府の軛を脱して獨立せんとする者には後援たるべき事を宣揚した。

「ルイ」十六世罪を國民協議に得、刑死せられてからの「フランス」は即ち恐怖時代に入つた。

斯くの如く怪雲急がしく天を覆ふて腥風地に荒む昏亂の「フランス」が命運の行く所を察して獨り陰かに微笑してゐたものは即ち「ナポレオン」であつた。

彼は革命に同情してゐた、屈服せる母國をして再び自由の天日に浴せしむる機の近きを喜んだ、彼は「フランス」の動亂に對して深き注意

を以て對した、「ヴルサイユ」王宮に開かれたる議會に四人の議員を出すを得た「コルシカ」は革命の餘波を享けて漸く蘇回の運に嚮つた。が一度は時利あらずして屈した「パオリー」一派の「コルシカ」の志士は天下の形勢を見て再び立つた、「ナポレオン」も亦故國に義心あるもの、遙に志士と通じて鄕民の爲めに佛王政府に訴ふる所あつた。

自由を叫ぶ民黨の協力によつて「コルシカ」は程なく屬領の境を脱して「フランス」公民として新憲法治下に立つことが出來た、「ナポレオン」は「コルシカ」の名譽蘇回を喜ぶと共に區々たる從來の佛人に對する憎惡の念を去つて「フランス」即ち故國てふ念を抱くに至つた、「コルシカ」の志士には未だ慊らず考へてるものも多かつた、專念獨立を心に期する者もあつた、が「ナポレオン」は最早や「コルシカ」島民にあらずして「フランス」新政治下の愛國者であつた。

彼は風雲の急なるを見ると共に暇を賜ふて郷里に歸つた、母國の爲めに奔命して歸隊の期を失して軍籍を削られた、其後彼は「フランス」に出でゝ痛快なる革命の經過を傍觀して私かに機の到るを待つた、頓て「ナポレオン」は「コルシカ」在勤を命ぜられた、彼は再び劍を執つて佛軍に復役した。

「コルシカ」の志士「パオリー」は、嘗ては佛軍に抗して英國に亡命の身を寄せたが佛蘭西王室の赦免に逢ふて歸來心を「フランス」王室の恩惠の厚きに動かしてた、果然革命の慘禍「フランス」に起つて「ルイ」十六世投獄の累に逢ふときくや佛國民の暴に憤して起つて佛蘭西新政府に抗した、「ナポレオン」は新政府に仕ふるの一人である、嘗ては死生相許した「パオリー」等とは茲に立脚地に異にして來た、等しく「コルシカ」愛國の至誠に働く志士である、が一は舊政府の恩義を多として新政府

の暴を憎むものである、一は時勢の洪流に棹して百年平和の礎臺を新政府の下に築かんとする者である。兩者相容るゝこと今にして難中の難事である、特に「ボナパルト」一家は嘗て郷黨に變節の不信を買ふてゐる「ナポレオン」の苦衷は志士に通ずる由がなかつた、然るに彼の小弟「ルシアン」が私怨を以て「パオリー」等を讒したのと、反對黨の好言とによつて「パオリー」等は時の革命政府の忌憚に觸れるようになつた、千七百九十三年睦月の下浣に「コルシカ」の志士は起つて新政府より獨立すべきを宣言した、「パオリー」は一味の推す所となつて再び獨立軍の首領となり叛旗を「フランス」に飜した。

此に於て「ナポレオン」兄弟の行動は島民の憤怒の的となつて彼等は叛逆の徒を以て目され「ボナパルト」一家は母國を追放さるゝことになつた、激怒せる島民は「ナポレオン」兄弟を捕縛せんとしたが、彼の一家

は危き難を逃れて同年五月僅に身を以て「フランス」に入ることが出來た、「ボナパルト」一家の者が恁うして生命から〳〵「フランス」に逃げた後は其の困窮は非常であつた、彼等は「フランス」の船に助けられて「ツーロン」に上陸してから「マルセイユ」に至りて漂零の一家は其處に細き煙をたてることになつた、兄弟各々職を探ねて母を援け慘めな生活をすることになつた、隊に歸つた「ナポレオン」も哀れなる一家を支ゆる爲めには實に少なからぬ辛勞をした。

飜つて祖國の志士を見ると「パオリー」等が狂熱も長くは續かなかつた獨立軍は其後脆くも敗れて徒黨四散し「パオリー」は「ロンドン」に流寓するの止むなきに至つた。

「フランス」の革命は此の時全歐に波動して、歐州の天地は恐るべき戰雲の包む所となつた、革命黨の檄列邦國民に傳へらるゝや全歐の帝

王は慄然として立つて武を備ふに至つた、「フランス」新政府は兵三十萬を徵し軍資十億「フラン」を募つた初めに英、蘭、西に戰を宣し、次で墺、普、葡、羅馬、「サルヂニア」等にも宣戰を布告した。

斯くて來りし恐怖時代の「フランス」こそは頓て吾等の英雄「ナポレオン」が曠世の雄圖を抱いて立つて大經綸を行ふべき準備時代であつたのだ、落魄の年少士官が前途や如何。

雨か、嵐か、秋風寒き「フランス」の野に曠原の獅子王は放たれた。

第七　蓋世の意氣

「マコレー」の所謂痛切なる必要に迫られて、急激に大變革の行はれた「フランス」國内の紛亂は一朝にして鎮定すべくもない、が其の革命

熱の傳染を恐れた列邦は共和政体の中實全からざる時に於て之が殄滅を企て歐州全土を震蕩せる殘酷なる大爭亂の端緒は早くも披かれた。

專制主義と自由主義との戰は始まつた、共和主義と君主主義の抗爭は行はれた、第一同盟軍の「ライン」河畔に襲來せる時は「ナポレオン」は未だ一介の壯童に過ぎなかつた、今や彼は青年士官として私に機を窺つてゐるのである。

恐怖時代に入つた「フランス」には續いて「チルミドル」の變起つた、誅殺は到る處に行はれた、殘忍なる刑戮に戰いた國民は漸く革命の慘禍に眉を顰むる者あるに至つた、民心愈々動搖して來た、革命の機運旋回して恐怖時代の暴を憎める南佛の志士は恨を革命黨に報せんとして心を王室に致す者多かつた、英、西の艦隊「ツーロン」の港に據つて之を助くるに到つて血雨またこゝに降つて修羅巷は活現された。

「ナポレオン」は陸の要所に屯して計策を回し、一擧にして英西海軍を潰走せしめた、險に據り備を堅うした反逆の徒は英、西軍の破るゝと共に盡滅した、彼は此の戰に於て深遠なる智謀と大膽なる戰畧によつて屹然として頭角を現はした、勇悍なる年少士官は其の功勳によつて一躍旅團長となつた、昨日窮迫に泣いた「ナポレオン」の頭上に幸運の手は下された。

千七百九十五年新憲法は布かれた。元老院、衆議院を置いて法案の提供を後者に其の贊否の權を前者に歸し相輔けて立法の大權を掌らしむることになつた、而して兩院から執政五名を選出して行政權を托することにした、共和第三年憲法は斯くてなつたが反對黨の起るあつて又も紛擾を惹起せられた、暴徒四萬王宮さして攻め來つた時

義會の勢は仲々に旺なものであつた、義會は義會の防禦を「バラース」に命じた、市長「バーラス」は少壯士官「ナポレオン」を推薦して之が鎭定軍の總督とした、白面倭少の少壯士官を紹介せられて驚いたのは他の將士である、人もあろうに……如何に「ツーロン」攻擊に於て勇奮よく意外の功をなしたとはいへ未だ「ナポレオン」の眞價は認められてゐない、諸將互に面を見合はして啞然たるものであつた。

「モーリン」將軍は少壯總督に向つて口を開いた。

「重要なる地位を足下に任ずる所以は、名望ある「バーラス」の熱心懇切なる推薦ありしが故である」

「バーラス」の好意を陳謝すると共に、熟慮以て任を全ふするを期せよとの意味はきく迄もないが、老耄將軍何をか言ふと云はぬばかりの少壯將軍は冷然として其の態度は憎き程落ち付いてゐる。

「あらず〳〵、今度の任命は少しも予より乞ひ需めたのではない、而して此の任命を快諾したのは精密に視察して予の力量よく之を措置して餘りあるをみたからである、成算胸にあるが故である、予は他人には何の累る所もない、予は成算なき事を敢てする如く愚蒙の徒ではない」

老婆心か親切か何れにしても「モーリン」將軍は事の重大なるを氣遣ふたからいつたのである、共和政府の興亡は此の一擧にある、暴徒一度「チユイレリー」王宮を犯すの時、萬事即ち窮するの日である、「ツーロン」の攻擊とは事が違ふが、如何なる成算胸に在るにや「ナポレオン」はたゞ譯もなくいつてしまつた。

而しながら「ナポレオン」は彼自身の言ふ如く敢て迂愚の徒ではない、成算なくして大事に當る程輕佻の輩ではなかつた、敏活に敵の機先

を制するは彼の天才である、彼は直ちに「セイヌ」河畔に若干の砲兵を配して五十門の大砲を備へた、「ルーブル」宮庭に八千の主力を集めて忽ちにして警備はなつた。「モーリン」將軍をして其の大膽なるに驚かしめた「ナポレオン」は再び其の敏速なる活動に將士を驚愕せしめた、百萬の敵も來れとは此の日「ナポレオン」の意氣であつた、斯くして彼は悠々として敵の來襲を待つた、暴徒は「ナポレオン」の軍ありときいて色めいたが、何を小癪な白面士官の肝を挫いて呉れんものと勢を恃むで押し寄せた。

時は來た、機は熟した、號令一度傳はるや砲兵は雨霰と散彈を敵に浴せかけた、先陣崩れたつては續くべき後陣のない暴徒である、算を亂して殪るゝ味方を振り棄てゝ流石の大敵も潰走してしまつた、彼は實に成算なきの戰をせなかつた、倭軀白面の少壯將軍は、悠々

として凱歌を擧げた、其の意氣は已に四海を呑むで居る、高の知れたる暴民の一揆などは眼中にない、一度は疑ひ、嘗ては腹に嗤つて今に高言の舌の根爛れるの時を見よと侮つてた多くの將相も舌を卷いて彼の前に唯々として服するに至つた、

其の日「バリー」城下の慘狀は目もあてられぬ程で暴民の屍は累々として横はり血は流れて河をなしてゐる、戰は其の夕に至つて歇むだ。

市民が其の夜の談は今日の戰況にある、話題の主人公は言はずとも「ナポレオン」である。あの弱冠士官は惡魔か外道か、叛旗は翻したりとも同じく佛蘭西人なるに慘殺斯くの如く、無殘此く迄に慘禍を一日に演出する其の行動、頓ては此の血此の肉の恨みを享くるの日あるべしとは「ナポレオン」の功を妬み、其の好評を羨みたる一部人士の擯斥論であつた。が短檠の下に額を首め勝利の恩惠を喜ぶ圍欒の席

に迭に市民の稱ゆる聲は、白面將軍の膽度勇悍である、「ナポレオン」は今や市民の輿望を負ふて現政府保護の軍神の如く崇めらるゝに至つた。

彼は或人が當日の戰振の餘りに猛烈なりしを見て斯くては御身は世人を恐怖せしむべきことをしたのであるといつたのに對して、

「或はそうかも知らない、凡そ兵事は政府が因つて以て其の目的を達せようが爲めに動かす、機械に過ぎないのだ、だから兵士は政府の命令する所にたゞ從つてをればよいのである、且つ予の希望する所は「パリー」市民をして予は「フランス」を愛する心の外に敢て他事なきを知らしめようとする迄である」

といつて其の眼を輝かすのであつた、

彼は亦「區々たる今回の小戰爭の如き予の爲めには名譽を博せんと

する端緒に過ぎない」といつた。實に彼は此の戰によつて初めて彼の生涯に局面展開の端緒を開きねたのであつた、彼は巴里府民の嘆稱を得て功なれりと喜び安ずる程正直でなかつた、彼の野心は區々たる一都府の軍神を以て甘ずるには餘りに大でなかつた。

氣宇四海を呑む、彼は今や風雲を掀翻して天下を蹂躪せんとしてゐる。曠原の獅子王は之より全歐の山野を風靡せようとして陰に牙を磨いた。

議會は「ナポレオン」の功績に酬ゆるに巴里駐屯兵司令官の職を以てした、「ナポレオン」の眞活動は是から初まる。

第八　情のナポレオン

英雄兒「ナポレオン」の生涯は今や局面を展回してきた。駿馬伯樂に逢はざりし間は駑馬と互するの外なかつたが、蟄龍風雲に際會しては遂に地中のものでない、吾等の大英雄が曠世の大經綸を行ふべき時機は漸くにして近づいて來た、非凡の手腕を振ふべき機會は與へられた。離島の貧乏貴族、「コルシカ」の追放人は今や巴里駐屯兵司令官として隆々たる偉名は國民が渇慕の中心となつてゐる、花々しき英雄の歴史は此の時から初まるといつてよい。

吾人は今の其の痛快なる英雄の奮闘史を語るに先だつて小しく情界の此の偉人を紹介すると共に、「ナポレオン」の戀女房「ヨセフイン」に關

して英雄佳人想志の伉儷の如何に睦まじくあつたかをうかゞはんと欲するのである。（ヨセフインについては後篇に詳しく書かう。）

「ナポレオン」が巴里駐屯兵司令官となつてからであつた、彼は令して人民の兵器を悉く徴發沒收した、そして愚蒙の徒の暴擧なからんことを期した、其の時沒收した兵器の中に一振の汚れたる劍があつた。此の劍こそは「ナポレオン」と「ヨセフイン」を結びつける運命怪しき緣の糸であつた、怎奈こゝも氣のつかない「ナポレオン」は他の兵器と共に取扱つて何等の注意を拂はなかつた。

或日一人のみすぼらしき少年が此の威名高き新司令官の陣營を訪ねて來た、年は僅かに十二歳計り、其の服裝は實にきたないものである。が其の姿の何地やらに床しき父母の身の上の偲ばれる勇ましい少年であつた。

少年は男々しくも自ら「ユーゼン、ボーハルナス」といふ者なる旨を語つて此度政府に押收したる兵器の中に父の遺愛の劍あるにより下渡して呉るゝよう眞情を現はして懇願した、其の劍とは即ち「ギロンヂスト」黨中の志士「ボーハルナス」が斷頭臺上の露と消ゆるの前に常に離さなかつたもので其の遺兒にとつては最も思出多き好紀念物なのであつた。

「ナポレオン」は義に殉じ、主義に殪れたる憂國の志士の遺族に同情すると共に遑がに勇士の面影を偲ばせる此の少年の勇氣と孝心に動かされずには居られなかつた、孝子の面には誠心が現はれて居る、其の語る所には哀れが滿ちて居る、有情の「ナポレオン」は直ちに其の乞を容れた、「ボーハルナス」の遺劍は「ユーゼン」の手に歸つた。

如何に男々しくても「ユーゼン」はまだ十二の年少兒である、亡父の遺

愛の帶劍を手にして見ると今迄の張りつめた氣も心も緩むで來る、と共に譯もなく悲しくなつて堪へてゐた涙が一時に瀧となつて流れる、「ユーゼン」は父の遺劍を犇と抱いて、他愛もなく聲をたてゝ泣いた。

孝子の心腸。

さもこそと察した「ナポレオン」も遑にいじらしい此の樣子に泣かされて思はず顏を背向けて暫時は言葉もなかつた。

其の次の日になつてまた一人の年の程三十前後の美人が訪問て來た此の婦人こそは志士「ボーハルナス」の未亡人「ジョセフイン」であつた、一子「ユーゼン」が昨日の非禮を謝して少壯將軍の厚意に對して心から禮をいつた、此の時の「ジョセフイン」は零落悃乏してゐた時分だから其の風采を裝凝しては居なかつた、脂粉を粧はない憂きに窶れた大年增の「ジョセフイン」は天性の麗質未だ衰ゆる迄には至つてゐない、

却つて其の楚々たる姿は五つも年下の白面將軍が魂を奪つてしまつたのであつた。

「ナポレオン」は今迄は生活の重き軛に苦るしめられてゐた、少しく名をなして後は大なる野心の爲めに他事を省みるの暇がなかつた、當時の才人と互して美人の品評に暮すなどのことはなかつた、彼は今年二十七になる迄は女について考へたことはなかつた、其の頃の「フランス」は上下共に女性を尊敬して男子は一意其の愛憐の手に果報を得んものと腐心してゐた、が奈翁は寧ろ女性嫌かとも思はるゝばかりに女に對して無頓着であつた、是迄の境遇は其の一因であつたかも知れない、と共に彼には焔々と胸に燃ゆる大野心の爲めに日夜心を勞してゐたから迚ても女などの眼にいるを許さなかつたのであつた。

昨日其の子「ユーゼン」の健氣なる志に泣かされた「ナポレオン」は美しき其の母、なる人について少なからぬ注意を拂つて接した、ア、此の母にして此の子ありだと坐ろに感じた「ナポレオン」の眼には若き美しき未亡人の姿が如何に崇く見ゐたことだろう。

或者は評していふ、「ジョセフイン」は貴族「ボーハルナス」の未亡人である、彼女は良人の刑死と共に零落はしてゐるが有力なる知友は尙ほ澤山にある、功名と野心に驅られてゐる「ナポレオン」は「ヨセフイン」の容色に戀するよりも先づ自己の功名の踏臺にすべく彼女の周邊の有力者に眼を吳れた、そして彼は進むで彼女の歡心を買ひ、深き政策を有する結婚は行はれたのだ……と、吾人は敢て之を否定して終うとはせぬ、大名譽を得んが爲めには手段を撰ばなかつた、「ナポレオン」が此の美しき未亡人に對して、戀をしながら半面には怎奈利害關

係を考へてゐたかも知らない。而しながら恁うして一度相逢ふての後は日一日と二人の間は接近して來たのであつた。

「ナポレオン」が此の時の愛情は「ジョセフイン」をして、或は一時の狂的發作でないかと疑はしむる迄に昂騰してゐる、彼女は自身が既に妙齢を過ぎて決して空なる戀の童神が惡戯の手に迷はさるゝ年ならぬを省みて殘んの色香に迷ふ浮かれ胡蝶の何れは長からぬ戀の壽命を呪ふのであつた、が「ジョセフイン」とて石でない木でない、嘗ては十四の肩上げもとれぬ乙女の身にて早くも若き男の燃ゆる唇に熱き接吻を願ふた程の涙も血もある身だ、今だとてうら淋し孤閨に絞り敢へぬ涙を拭はんと言ひ寄る男は數多い、褪せ果てぬ色香を慕ひ來る蜂や蝶や何れは浮氣の風に誘はれた醉興とは知れど人の情の嬉しからぬ身でもない、が一度は乙女の戀の果敢なきに泣いてツク〳〵と

男心を怨むだこともあつた、敗れたる心の傷を「ボーハルナス」の眞心に癒やされて春を我世と喜んだも一時、かりそめならぬ情に生むだ二人の子も今は遺物の悲しや良人は刑臺の露、身は落魄の寄る邊なき今日此の頃、まこと身も魂も任すべき殿御あらばと思はぬでもなかつた、幾年月の苦勞に弱きは女心の兎角は迷ひ勝ちなる心の内には亡き良人の紀念の二兒の前途を思ふて情ある人もあらばとの念も出ぬでなかつた、けれども戀には苦るしむだ女である、男には惱まされた「ジョセフイン」である、先夫「ボーハルナス」戀しの思ひは全く消ねて居らぬ、多くの經驗と境遇から猜疑心の強い眼で戀も眞實も批判してゆく女は前の先き迄考へる、勇ましい「コルシカ」の巨木、漸く四海に枝を張ろうとしてゐる花も實もある此の大巨樹を生命の柱と絡まりたい姫蔦の優しい心の内を惑はすものは戀の生命の長短であ

る。

「ジョセフイン」は「ナポレオン」の親切に絆されながら、心には尙ほ迷つてゐた。熱烈なる白面將軍の戀の醒むべき時を顧慮して遠に無情は振りも拂はなかつたが進むで抱こうとはせなかつた、「ナポレオン」は今は若き美しの未亡人に獻身の愛を灑いで深草の風流郎が百夜の實意も何のものかは煩劇多忙の閑を盜むでは「ジョセフイン」と會談に總て媚言を吝まぬのであつた、「ジョセフイン」は彼を敬愛するよりも寧ろ餘りの狂熱、怖れを抱いてゐた。が緣は異なもの味なものとの俗唄の如く「ジョセフイン」今は何時までも「ナポレオン」の誠實に背向くことは出來なかつた、二人は何日か相思の胸を抱き合ふて心ゆく迄戀の咢に胸を躍らすのであつた。

千七百九十六年三月十九日、英雄と佳人とは友人の家に於て會心の

朋友數名を招いて質素なる結婚の式を擧げたのであつた。

恁うして結ばれた佳人英雄の伉儷は最も睦まじくあつた、大偉傑「ナポレオン」が初めて其の覇足を伊太利に伸ばすに至つたのは之に關連してゐる、情の英雄を叙べるは之位に止めて置いて吾人は伊國遠征に於ける偉人を記すとしよう、「ジョセフイン」に就いては澤山記すことがあるが後編に詳說することを期して此處では多く語らぬ。

第九　伊太利遠征

狂烈なる少壯將軍の戀嬉しからぬでないけれども、悲らかりし戀の經驗は「ジョセフイン」をして幾度か逡巡決するに躊躇せしめた、苦るしかりし愛の矢傷を思出でゝ人の眞實に背向んとせし「ジョセフイン」

は迷ふ心に決しかぬる思ひの丈を朋友によせて其の裁斷を願ふに至つた今年三十幾つの大年増も「エロス」の弄手に嬲られては戀に初心なるさまのいじらしい。

逝く春を惜まれしも昔の夢、今更らに浮きたる戀に迷はかさるゝ年にも之れなく候、數ならぬ妾を愛し給ふ「ナポレオン」どのゝ厚き御情、冥利の程も恐ろしき勿体なき程の御執心、世にもありがたき御心盡し身に沁みぐゝと御嬉しう存じ居候へども、悲らかりし昔思へば、何れは若き殿御が一時の御醉興、色香褪せ逝く婆櫻が戀の生命の長かろう筈もなく、落花に狂ふ胡蝶さへ浮氣の風に誘はれてこそ。しばしは老本の葉陰に殘んの色香探ねても居れ、頓ては若木の枝に眞紅の戀を憧れて去るならひ、切なきは人の眞實哀しきは戀の生命、たゞ先きだつは涙にて候、かく申せばとて益

なき心づかい、いらざる深思案の愚者よと御笑ひ下さるまじく候戀の生命の果敢なさに泣く日思へば、拙なかりし運命の妾が身の索かれ行く緣の絲の怪しき末まで考へられて、唯さへ昏き今日此の頃の心は迷ひ惑ふて搔むしらるゝ程に切なく候、惱み悶ゆる明け晩れは吾が身にかゝる事ながら思案に餘つて決しかぬる纏綿たる胸の内あわれ御察し被下度候、常日頃の君樣が厚き御誼に甘ゆるには似たれどもならばれ友達甲斐に妾が心の縺れ解き給ふて何角の御差圖願度く。よくもあしくも君樣の御言葉に隨つて此の惱み此の悶へ處斷いたすべき存念にて御座候。

「バラース」樣の仰せには妾事「ナポレオン」どのと結婚いたし候ならば「ナポレオン」どのを伊太利遠征軍の司令官に御盡力下さるとの事にて御座候、昨日「ナポレオン」どのゝ申さるゝには、

予が伊太利に征くことは未だ内約のみにとゞまつてゐるが、我が兵卒等は之を聞いて不平を鳴らしてゐるとか、抑兵卒等は予が權力を得んとするには必ず彼等の力をからねばならぬと思つてるのだろうが何といふ誤解の甚だしいことだろう、彼等こそ予が幸福を與へるのでなかつたなら自分で幸福を得ることは出來ないのだのに、が予の腰間には予の寶劍が鳴つてゐる予は去つた伊太利に行かねばならぬ……

との御言葉にて候、榮譽を思ふの念強き「ナポレオン」どのが御自分の腕と力とを御信じ遊ばすことの堅き、斯くは御決心遊ばさるゝに至りしものと存じ〻〻云々……

而しながら二人は遂に相抱くべき機會を得た、「バラース」等の仲介甲斐あつて芽出度英雄の戀は成つた、佳人と英雄とが詫びしい結婚の

式を擧げてから旬日餘にして「ナポレオン」は伊太利駐屯兵の司令官に任命せられて征途に上つた、果して之が「バラース」が二人の結婚に對する英雄への引出物であつたかどうかは知らない、が「ナポレオン」は戀に勝利の饌別を喜んで勇ましく南征の途に就いた。

其の月の下浣に「ナポレオン」は意氣揚々として家族を「マルセイユ」に見舞ひ、母や兄弟と勇ましく袂を分つて再び征途を急いだ。

彼が「ニース」にある佛軍の牙營に到達した時、「フランス」の軍勢は困弊其の極度に達してゐた、將卒多く戰殁して殘餘の軍は統一がない、軍資の窮乏は少なからず將卒の意氣を亂して一向に振はない、が「ナポレオン」には此の兵、此の軍を率ひて事に當る丈の成算があつた、彼には強き自信があつた、大將來るの聲は沈衰せる兵士の惰眠を破つて軍から軍に傳へられた、迎へたる新大將の如何なる人品なるが

を想像して軍容頓に色めいて來たが、彼を見るに及んで將卒は共に期待の大なりし丈多大の落膽をせざるを得なかつた。

倭軀白面の少壯將軍を見て何れも面を見合せて咡き合つた、其の眼には輕侮の色が現はれてゐる、膽度如何に大なりとも、智謀古今に絶すればとて威容揚らざる白面將軍抑何程の業をかなし得んやとは兵士の心の咡きであつたが、彼に接する暫時にして漸く其の人を解するに至るや、吾等の大將は其の人を得たりと叫ばざるを得なかつた、彼は衰餘の軍を勵まして墺伊の大軍に向つた。

彼は晝夜馬背に跨つて配下の軍を指揮して些しも困憊の色を見せなかつた。

「ナポレオン」は一度墺軍を北伊太利に擊破し、四月下旬に「トリノ」に逼つて「サルヂニア」王「キトリオ、アマデオ」をして「サルヂニア、ニッツア」

を割かしめ、翌月「ミラノ」に入り「ボロニア」に於て羅馬法王「ピオ」六世と和した、それより「ナポレオン」は益々進むで伊太利に集る墺軍を連りに破つて「チエチア」を降し翌年三月「ケルンテン」を徇へ、「スタイエルン」の「ブリユク」を衝いた。

彼は雪の「アルプス」を越へて長驅墺都維納也に城下の盟をなさしめようとした、墺廷の震駭は一通りでなかつた、「カール」の諫諍も耳ないで四月に假條約を「レオベン」に締むだ。

「ナポレオン」は此に於て五月「エチチア」に入つて其の共和政を停め、資財を奪ふて「シスアルピナ」共和國を創置した、また「ゼノワ」を「リグリア」共和國とした、後九月執政「バルテルミー」、「カルノー」二人を罷め、十月十七日墺地利と「カムポフオルミオ」の本條約を締ぶに至つた。

此の時から「フランス」は墺領「チーデルランド」、「イオニア」諸島、「エヂチ

ア「及び「ライン」河西の地を得るに至り、「シスアルピナ」、「リグリア」二共和國は認諾せらるゝに至つた。

征途にある二年、彼は光榮ある戰勝の威武を荷ふて凱戰した。

軍虜を得ること十一萬五千餘人、軍旗を奪ふこと百七十流、砲門を獲ること千百四十門、此の大勝に歡喜せる國民は「ナポレオン」を神明の如く渴仰した、彼が戰利品は之丈に止まらなかつた、繪畫彫刻等多くの古美術品は山の如く日々巴里に運ばれたのであつた。

彼は今や伊太利國民より自山の神と崇められ、「フランス」の四民は心から彼の前に凡ての讃辭を呈するのであつた。

彼は今や伊太利に非常なる勢力を得るに至つた、彼の燦爛たる戰勝の光榮は「フランス」全土の民をして歡喜と渴慕の念に狂せしむる程であつた、佛國民は此の英雄兒が神怪なる手腕に醉はされてしまつた。

「フランス」の守護神は「ナポレオン」ならざるべからずと迄信賴した、宿昔の志其の一端を遂げ得たる「ナポレオン」が此の國民に對する態度や如何、鵬翼一搏、全歐の天地を驅らんは心のまゝである。

第十　閑臥自適

南征の勇士は凱旋した、「フランス」の國中は湧き返るような騷ぎをした、狂するが如き市民は今や巴里城下に歸り來る戰勝の將卒を迎ふるが爲めに狂熱の極にまで達してゐる、此の時の「ナポレオン」の得意や思ふべしである、彼が後日當年を追想して黃金時代の快樂を夢みて喜んでたのも無理でない、彼は今や四海を併呑してゐる、國民は彼の心のまゝに動くまでになつてきた。

而しながら何れの國、何日の世にも榮譽の面裡には嫉妬の神が陰むでゐる、幸運の背後には惡魔が付き纏ふてゐる。

「コルシカ」の一追放人が灼赫たる功名と隆々たる威勢をみて、澁面つくつたのは當時「フランス」政府の要路にあつた凡愚の徒であつた、彼等は狗盜の功によつて民衆の眼を眩まし僅に贏ち得たる自己の地位の爲めに偉人の出現を拒まねばならなかつた、「ナポレオン」が鬼神の如き戰振りを稱讃する國民の聲は彼等の爲めには大なる呪ひの聲ときかれたといつて、漫に此の戰勝將軍を斥ける譯には尙更らゆかぬ。彼等は鳩首して凝議した、「ナポレオン」が墺國と盟を約して伊太利に止まつてゐた時、彼等は間者を派して彼の動靜を監視せしめた、凡愚のやり口は常に恁うである、深智遠謀の「ナポレオン」は彼等の間者に尻尾を捕へらるゝような間抜なことはせぬ、彼の「ミラン」に歸りし

時、「ナポレオン」の深慮迚ても窺ふべからざるを嘆ちて一間者は次のようにいつた。

其の容貌は曾て見た寫眞と異りない、骨格小にして肉落ち色青く自ら疲勞の体が見えたが、病氣でない、虛心平氣能く人の言ふ所をきき自分で頻りに之が工風を費やさんとする樣子があつた、其の風采は聰明叡智であつて沈思熟慮してゐるようにみえた、其の何を思ひ考へてゐるかは迚ても窺知することは出來ない、たゞ其の大膽にして考へてゐる中には全歐の氣運命數に關係せる大計劃があると想像しても不可ではないように思はれた。

而し)ナポレオン(は速くも俗吏の奸手段を迴らしつゝあるを知つてゐたから却つて彼等の間者をして彼の策計に乘せ上げた、彼は政治上に關する事は當時側に侍つた「ジョセフイン」にも聞かさなかつた、彼

の方寸に藏する計劃は何人の窺ふことをも許さなかつた、手を拱いて沈思熟慮する偉人の心中には果して如何の計策が廻らされてゐたことだろう、「ジョセフイン」は或時友に語つて

妾が「ナポレオン」どのと結婚してから最早や幾春秋をかへたけれども未だ嘗て少しの間も我が良人の心の安然たることのあつたのを見たことがない、夫婦の妾にさへも心を措いて何事をか計策してゐられるようであつた、時に信を措くに足る者と人を遠ざけて眞摯に密談せらるゝこともあつたけれども其の場合にも決して心から打ち解けて眞心を全く吐露せられることはなかつた。

といつた、實に「ナポレオン」は凡てを身一つの胸に收めて如何なる腹心の者に向つても全く相許すことはせなかつたのであつた、人は之を以て東洋豪傑の落々たる襟度、磊々たる其の心懷に批して「ナポレ

オン」の小心翼々たるを嘲ふけれども、そは大なる誤りである、彼が小心を裝ひ、彼が平穩を衒ひ、強て胸中の野心を現はさなかつたのは却つて彼の偉なる所以であつて、所謂男兒門を出づれば七人の敵ありとの俚諺もある通り當時の「ナポレオン」が威名を妬む者は非常に多くあつて彼にして一分の隙だにあつたならば直ちに凡愚の乘ずる所となるべき憂があつたのであつた、渠が爲めには外敵に當るよりも内に賊せんとはかる是等俗吏輩に對することが一層の痛苦であつた位である、身を愼み、言行を和げて奸吏を籠絡し終せたる「ナポレオン」は悠々として狂熱せる市民の歡迎を受けたが、彼は嘆美者の中心となつて功名を論ずることは欲せなかつた、彼は光榮ある捷報を市民の前に齎すと共に身は都塵の巷を去つて「リユカンテレイン」在の地をトして悠々自適敢て曩日の功名を知らざるもの〻如く讀書三昧

に機雲を待つのであつた。

彼は軍服を脱いで劍を棄て儒服を纏ふた、昨日迄は鬼神も靡けし少壯將軍、今日は世外に古賢を友として敢て時世を論議せよともせぬのであつた、彼が輕裝して偶々市中を徽行することがあつても昨日三軍を叱咤した將軍だとは知らずして誰一人の省みる者もなかつたけれども必ずや功を以て廟堂に權威を振ふべしと思惟してゐた國民は「ナポレオン」が國民嘆稱の中から狐鼠〳〵と脱して功名を忘れたる如く悠々迫らず閑臥讀書に餘念なきを見ては其の床しさに一層渴慕の念を增すのであつた、國家は此の勳功ある勇將に酬ゆるなしには濟まされなかつた、少壯將軍は冕めずして諸將相の上に位するの名譽を有つてゐた、而しながら「ナポレオン」自身にとつては榮譽は乃ち榮譽なりと雖も未だ以て彼が素懷を達したといふでもなければ。彼

自身に功成れりと滿足する丈の事をしたでもなかつた、彼は將相の上に位して國民の渴慕を集め得たからとて安ずる者ではなかつた。彼は陰に機運の熟するを待つて大に成すあらんとしてゐる悠々野鶴を友として讀書三昧に日を暮らしては居るけれども彼の胸には焰々たる野心が燃ゑてゐる。

政府の顯要に在る將相は「ナポレオン」の英才に驚怖せると共に其の功名を嫉むでゐる、彼等は「ナポレオン」が胸奥の野心を洞破せんと焦つたけれども胆斗の如き奈翁の方寸に秘めたる智謀の一端だにも窺ひ知ることは不可能事であつた。威信漸く傾きつゝある政府、心ならずも將軍の榮譽に酬ゆると共に南征の將卒の爲めに人民の輿望に從つて凱旋の式を公然行はざるを得なかつた。「ナポレオン」は條約書を差出し分捕品を納めた、「リウキセンホルグ」の朝廷は敵の軍旗幾十流

を飾つて盛大壯嚴なる式を上ぐるに決した、既に其の奇功に醉へる國民は遠近より光榮ある凱旋の式を觀むとて群集し來つて巴里城下の熱鬧混雜は非常なものであつた。

白面將軍は華麗なる凱陣の粧をして「パリー」街道に練り出した、陣營にある戰勝の兵は凛乎たる態度を以て痛烈なる歌をうたつた、現政府の俗吏を廢して吾等の將軍を首領となさんとは其の歌詞の意味であつた、熱狂せる群集は耳を傾けた、兵士は聲を揃へ調子を合はして喉も破れよと歌つた。

「バーラス」將軍は此の凱陣に臨んで群集に向ひ、頌讃の口調を以て叫んでいつた。

「ナポレオン」を造り出すが爲めには造化も其の全力を盡して復餘力なかつたろう!!。

「バーラス」の此の讃辭をきいた群集は我意を得たりと計り、一時にワッと囃し立てた。天も震い地も搖ぐばかりの歡聲裡に光輝ある凱旋式は終つた。

「ナポレオン」には未だ脾肉の嘆がある、けれども當年の得意は蓋し彼の半生史を通じて最大のものであつたろう、彼は何事をも胸に堅く秘して語ろうとはせぬ。

閑雲野鶴を友として田園の美趣に悠々自適せる「ナポレオン」を目して徒に偸安の風流兒を以てするは未だ當らぬ。

「ボナパルト」一家は今や貴顯紳士の崇拜の中心となつて、何れも顯要の地位に上つた、一門の光榮は零落せる昨日に較べて夢かと惑はしめた、が獨り「ナポレオン」は家族の驚喜も國民の歡待も他所事にして例に因つて熟慮劃策に餘念がない。

彼は友の一人に豪語していつた。

梨果熟するの時はまだ來ない、些々たる一時の事業何時までか人の腦裡に印象を止め得よう、永く無聊に慣れて吾力用ふるの所がなかつたならば吾輩も廢物となり了せん、此の「バビロン」の大に居ても一人名譽上らば他の名譽は地に陷ちるだろう、世人一劇場に吾輩を見ること三度ともならば吾また喝采を博すべき役者ではない、世人吾を見んと欲するの念旺なりといふは迂だ、恐らくは衆人堵をなして吾輩の刑場に索かれ行くを見るに至るだろう、吾輩は最早や巴里に止まつてはならぬと決心した、此の地に於ては爲すべきの事業とてはない、事時と共に過去に埋葬れてしまつた、吾名譽は今や陷落の運に向つてゐる、區々たる歐州の一隅吾輩の羈足を伸ばすに足らない、我經綸を行ふの地でない　如ず吾れ去

つて東方に稜々の奇骨を試みねばならぬ、凡そ世界の英傑が其の盛大を至したるは多く東國の雄大に據らざるはない、吾輩も亦去つて埃及に往くべし。

「ナポレオン」は凡愚の人を容るゝに難き迚ても自らを措くべき處でないと早くも悟つてゐたのであつた。

第十一　埃及征伐

今や「ナポレオン」の威力は中外を傾動して執政も戰かされた、政府要路の將相は彼の大聲望に對して自己の地位を顧念せざるを得なかつた、今や「フランス」は墺伊を征して積年の怨を雪いだ、革命の仇英國は佛人の眼に睨まるゝに至つた。

政府は聲望内外に高き「ナポレオン」を以て英吉利征討軍の將とした、「ナポレオン」は事の將に然かあるべきを思ふて苦笑せざるを得なかつた、彼は命を奉じて先づ沿海を視察した、彼は十餘日を出でずして地理を諳撿して英海軍の雄大にして佛國は迚も其の敵にあらざるを撿分して歸京した。

彼は「吾軍の勝利覺束なし、予は斯る危地に佛蘭西を導き入るゝを好まず」といつて討英の計劃を放棄した、渠は東邦遠征の念に胸を燃やしてゐる、彼は東方肥饒の富土に大經綸を行はんとしてゐる、彼は埃及を征畧して英國と印度の間を扼し、東方殖民地遮斷によつて打擊を英本國に加へんとした、彼は若し勢の行く處善く成算のあつたならば印度侵畧をも期してたかも知れない。

彼を信ずる佛人は其の壯擧に痛快を叫んだ、彼を嫉める俗吏は「ナポ

レオン」の武力益々強からんことを怕れた、が國内に在つて大權に與つて威を振はれんを恐れて政府は「ナポレオン」如何に豪なりと雖も遠く埃及に軍を進めて善く凱歌を奏するは難しと考へぬでなかつた、と共に征途上彼は「アフリカ」の砂漠に非命の死をなすべきを豫想して微笑を禁じ得なかつた、政府は喜んで奈翁の獻策を容れた、「ボーレーン」なる者彼の許に來つて、

埃及遠征は危險である、卿は進んで此の危險の地に生命を堵せんとせらるゝにや。

との問に答へて「ナポレオン」は次のようにいつた、

勿論なり、予にして此の地に止まり居らんには斯る拙劣なる政府を顚覆して吾其の上に立たざるを得ぬ、けれども時機未だ早い、余の心は既に決してゐるが要路の俗物未だ吾を容れないから姑ら

く時を待つのだ、時を待つ間の眠氣さまし、今に彼奴等の膽を奪つて吳れる迄だ。

千七百九十八年五月十九日。朝暾東の空に上つて世界は輝いて來た帆影太陽に映じて海上の壯觀は言語に絶した、熱狂せる國民が讃辭に送られて旗皷堂々船は動き出した。

軍艦十三艘「フリケート」船十四隻運送船四百隻半月の陣を作つて海に連らなること十八浬餘、精練の兵四萬餘人を率ひて「ナポレオン」は埃及に向つた。

此日「ナポレオン」は別に一百餘人の學者紳士を伴つて征途についた。是即ち埃及に於て古美術、古名什寶器を收拾し來らせんが爲めであつた、戰陣に將卒外の學藝の士を伴ふは此の時から初まつた。

斯くて威風堂々地中海の浪を蹴つて進み行く遠征軍は六月「マルタ」島に寄つて「セントジョーン」の兵を破つて此島を降し、「アレキサンドリア」に着いた、其の數時間前に「子ルソン」提督の率ゆる英艦此處を扳錨したりといへば間髪をいれざる危險に「ナポレオン」は兵を進めたが運よく敵艦に逢ふことなく上陸が出來た。

彼は閃電倏忽、よく敏速と猛烈を以て敵の機先を制するは最も得意とする所である、「アレキザンドリア」に上陸するや遠航の疲れを休む暇もあらせず、迅驅直ちに歴府を衝いて之を畧取した。

彼は炎熱の中に軍を進めて直路「カイロー」に向つた、七月二十一日「ニール」河畔に回教騎兵を破り數日にして「カイロー」を陷れた。

「ナポレオン」が南征の間に英提督「子ルソン」は「アブキール」に於て佛海軍を殲滅した、佛蘭西の兵は水師を失ひ歸途を絶れて孤立の姿となつた。八月一日「ニール」河口に英艦現はるとの飛報に次いで「アブキール」

の激戰に佛軍敗亡の報は傳へられたが、「ナポレオン」は士氣を鼓舞して「シリア」に向ひ千七百九十九年「ガザ」を取り「ヤフア」を陷れ、「サンジアンダルク」を圍むだ、土軍の守堅くして包圍二ケ月遂に拔くことが出來なかつたので棄てゝ埃及に歸つた、土軍其の後を踏みて埃及に入つたが「ナポレオン」之を「アブーキル」に破つてしまつた。

「ナポレオン」は頑强なる「トルキ」人の爲めに東方に志を遂ぐることが出來なかつた、彼が埃及遠征に於て得た所は少なかつた、而し彼は一年征塵に埋れてゐた間に他の將軍のなし得ざる事を爲した。

雄圖を胸に抱ける彼は運河開鑿に志して測量をした、二年の歲月と千八百萬法の豫算をたてた、が彼の埃及にある時日は之が實行に迄至らしめなかつた、彼は一百餘人の學者紳士を伴つて征途に上つた埃及を世界に紹介するには與つて力ある業をなした。

「ナポレオン」にはまだ綽々たる餘裕がある、勝敗未だ決するに至らず宿志其の緒に着かざるに茲に「ナポレオン」をして急に歸國せしめなければならない事件が本國に起つた。

地中海の佛艦隊は英海軍に亡ぼされて遠征軍と本國との連絡は堵絶せられてゐた、而しながら「ナポレオン」は本國の風雲急なりと聞くや埃及の軍を部將「クレベル」に托して英艦の隙を窺つて歸國した。

大經綸を抱いて遠征の途に在る「ナポレオン」が戰未だ央にして勿惶軍を部將に託して歸らねばならなかつた本國の事情とは一体如何なる出來事であつたのだろうか。

是よりさき三年、乃ち千七百九十六年に露西亞女帝「エカテリ」十二世殂落し、「パウロフ」一世たつて土、墺、英、葡等と連合して第二連合軍を起して「フランス」と戰つた。越ねて九十八年「ナポリ」王「フェルナン

ド」北上して羅馬に入つたが「フランス」軍之を擊破し翌年一月進むで「ナポリ」を徇へた、其處で王國を改めて「パルテノプ」共和國と爲した。

「トスカナ」太公、サルヂニア」王等何れも國外に奔つて伊太利半島は「フランス」に降つた、威武愈々揚ると共に執政は此の勢に乘じて大に六路の軍を興した、乃ち「ブルヌー」を荷蘭に、「ベルナドト」を「ライン」中部に、「ジュルダン」を「ライン」上流に、「マセナ」を瑞西に、「モロー」を上伊太利に、「マグドナルド」を「ナポリ」に遣はして征戰に努めしめたが、凡愚不明多く事を誤る、只管に佛軍の勇悍を恃むだ執政等の計策は見事失敗に終つた。「ナポレオン」の軍獨り天涯より光榮ある捷報を贏すあるも六路の諸軍は敗績連りにして四月「シスアルピナ」共和國亡び次いで六月「パルテノプ」共和國滅ぶに至つた。

列强は「ナポレオン」の不在を機として革命政府の顚覆を企てた、それ

が九十九年に入つては益々危機迫つてきたが當路の俗吏はまた如何とも施すべきの策を知らない、狗盜の功によつて贏ち得たる地位を守るに汲々たる執政は國家の難に處するの策を知らない、徒らに苛政收斂を之れ事として國民の怨嗟の中心となり世は再び恐怖時代にたちかへろうとした。

巴里の過激共和黨はたつて其の暴威を振はんとした、愚蒙なる執政は地に殞ちた、同年の議員改選の結果は執政をして殆んど、地位を失はしめんとした。

遠く埃及に在つて之をきいた「ナポレオン」は歸國せざるを得なかつた黑雲迅く「フランス」の天を覆ふて地は昏くなつた、腥風「フランス」の野に荒むで自由の狼烽を煽る、世界は今や修羅巷と化せようとした、事はいよ〳〵急である、革命政府は今や累卵の危きに置かれてある

鳩首邦家の前途を哀むの士は多いが、此の時立つて大聲叱呼一擧にして錯雜せる禍根を絶ち、犀狼の如き列强を遠く追迫すべき人はない、「フランス」の天地は騷擾を極めた、妖魔の跳梁すべき昏沌の世界は茲に再現せられた、昨日維武を誇つた國民は今日は劍戟の音に色相を變ゆるに至つた、戰勝の夢未だ全く醒めない國民は早くも禍亂の來るべき前兆に戰慄するのであつた。

第十二　統領時代

千七百九十九年の冬の「フランス」は慘憺たるものであつた、內外多事幾年の困憊に國民に生色なく餓孚窮民野に路に充滿して泣喚の聲に革命の慘禍を呪ふてゐる、俗官奸吏は只管に苛稅收歛を事として困

弊せる國民を慰撫せようともせぬ。

外には列强の連合軍の勢を和して國邊に迫り來るありて民心悒々として一向に振はない、渴慕する將軍「ナポレオン」は遠く埃及に在つて杳として確報に接する由がない、街巷に傳ふる所の流說蜚語何れ國民が暗愁を呼ばざるはない、政府顯要の人は動亂に乘じて僅かに衆愚の眼を欺き得たるの徒輩なれば卑賤の政策を弄する外、無能遂に何事をも爲すを得ない。

國民は切に一人の英雄の出現を願つてゐる、經綸の人、權威の士の起つべき時は來たのである、「ナポレオン」の所謂梨果は漸く熟したのである、恁奈時分にも案外呑氣なのは迂愚の俗吏共である、國家の存亡を他所に徒らに權を振ひ豪奢を誇るは彼等の常である、民衆は飢寒に沈淪せる際に不義の財貨を貪つて華榮を競ふ顯要の吏は怨呪

せられずしてやまない、風寒く天昏き十一月の九日の夕、政府の首領「コビアー」の宅に於て、盛大なる夜遊の宴が開催された、集ふ所の者は何れ劣らぬ賊吏奸商等である、珍味佳肴は彼等の前に山と運ばれた、錦綾繡羅に穢汚の形骸を包むで歡喜豪語、偏に一朝の快樂に魂を腐らしてゐる、寒に叫ぶの聲は朔風に交つて庭の樹々を掠めて窓外に擾ぐも、飢を訴ふの聲は門前に滿ちて、壁一重の外は此世からなる修羅の巷餓鬼の道、實に慘憺の極なるに、貪婪の吏、劫惡の官は此處に手を執つて舞ひ、盃を上げて祝し、たゞ譯もなう歡呼し亂舞するのであつた。

冬の夜は更けて風は寒い、暖爐の火も白うなつて燈火漸くに細い。酒に醉ひ、人に醉ひ、歡樂に醉ひ、人のいきれに上せた人達はまだ歸ろうともせぬ散會こうともせぬ、興盡き、歡に飽きての後でなけ

れば彼等は家をも身をも思ひ出さぬらしい、夜嵐ドット一しきり、內からは笑聲歡語がもれて來る、と丁度其の時、其折飛報は衆人の耳を驚かして稠座の中に投せられた。

「ナポレオン、ボナパルト今朝「フレジュス」に上陸す。獅子王歸來せりと聞いて驚いたのは賊吏共であつた、(ナポレオン)歸りぬときひて喜んだのは民衆であつた、一敗地に塗れてまたたつ能はず「アラビヤ」の熱砂の地に非命の死を遂げたりとの流說に微笑したものは今にして顏色を變せざるを得なかつた、地中海上の覇權英國に歸したりときいて遠征軍の消息なきに神を傷めたる者は手を拍つて喜んだ、歡興は醒めて騷擾を極めた、或者は顰し、或者は喜び、遠がの逸興も何地へやら遂には互に默して敢て語らんとする者もなくなつて迭に猜疑の眼を剖いて心中の秘密を讀まんとするのであつ

た、宴は盡さずして散じた、口から口に「ナポレオン」歸りぬの語は傳へられて忽ちにして普く其の聲をきくに至つた。

「ナポレオン」は孤影單軀險難を犯して、「フレジュス」に故山の山を莅み見て萬感胸に迫るを覺ゆるのであつた、彼は甲板に立つて刻々に接近する慘はしの山や杜やを望見して「フランス」の前途を左つ右つ考へずには居れないのであつた。

母在す國、妻住むの里、兄弟の家ある陸のなつかしさよりも彼には愚蒙の賊吏が國を過り、貪慾の俗官が民を害ね、百年の大計を亂す小人輩の跳梁するを憎く思つた、舟は徐々と進航して港に入つた。

渴慕して夢にも忘れざる英雄「ナポレオン」の船と知つた時、「フレジュス」の民衆は狂喜した、端艇輕舸を艤して奈翁の船を目的に集り來るは凱旋の將軍を迎ふるが如くであつた、祝賀の聲、歡呼の叫び海に

起り陸に續いて人は醉へるが如く狂せるが如くであつた、將軍會心の笑を含むで上陸するや、鐘を鳴らし祝砲を發ち、狼烽を燎いて之を祝し之を喜んだ。

「ナポレオン」は直ちに巴里に向ふた、陸續として彼に從ふ人は其の數幾何なるや知れなかつた、彼に對する國民の熱度は極まつた、彼を迎へた國民の態度は、聖徒が救世主を迎ふるが如くであつた。

獨り彼を憎み、彼を斥けんとする者は時の政府であつた、埃及に遠征の軍を棄てゝ歸つた「ナポレオン」の心中には必ずや大なる野心の包藏されあるべしと思惟せし總理は彼を迎ふるに至極冷淡であつた。

(ブリュメール)の十八日(十一月十日)「ナポレオン」は武力を用いて軟弱なる時の政府を顚覆した、「ブリュメール」の變は即ち「ナポレオン」帝政の第一歩であつた、十二月十五日には新憲法を定めた、即ち執政に

代ゆるに任期十年の三統領を以てした、第一絲領は行政の大權を握つてゐる兩副統領は之を補佐し、議員一百を有する代議院の議案を討議し、議員三百を有する立法院は議案を票決し、議員八十を有する元老院は議員判官を撰定任命することにした、共和政府の空名は斯くて存續せられたが其實は君主專制に近きものであつた。

「ナポレオン」は自ら其の第一統領の椅子に就いた、自由と平等とを標榜して立つて革命の慘禍を惹起してから未だ十年ならざるに「フランス」は既に其情勢斯くの如き有樣になつた。

彼が政治に於ける態度は軍事に於けるそれと變りはない、二人の副統領は袖佐役としてあるけれども凡ての權能は彼が掌中に在つて一言の容吻をも許さぬのであつた、而しながら彼が獨裁政治を行つたとは言ふものゝ彼は貪婪なるさきの執政が轍を踏むでたゞ一身の華

榮と豪奢を誇らんとした譯ではない。

凡愚の吏が爲めには僅に贏ち得たる其の地位其の椅子は生命である其の地位を守り其の椅子に何時迄も囓りついてゐたいのは彼等の中心からの願ひである、彼等の前には「フランス」もない、國民などのあろう筈がない、我利我慾、たゞ自らを除いては何物もないのである。

「ナポレオン」も野心の兒であつた、けれども彼の野心は大きかつた、功名は奈翁の胸に燃ゑてゐた、けれども陋劣なる手段を廻らして區區たる一椅子に離れざらんと焦るように小心者ではなかつた、彼の前には「フランス」は自己のものであつた、國民は其の蒼生であつた、彼は此の國此の民の强からんことを願つた、平和や、秩序や、富やそれらは彼が國民の上に與へんとした大なるものであつた。

其の頃の「フランス」は衰弊の極に達してゐた、「ナレポンオ」は意を改革

に用ひて秩序回復に努めた、彼は法典の編纂を始めて平和を列國に求めた、「ロシア」は第一に同盟軍を脱した、千八百年、瑞、墺、普の三國は別に北歐會盟を組織して中立を守つた、唯英國は「ブルボン」王朝の回復を期して王政蘇回せざるの間は和せずとて容るゝなく、墺軍は伊太利を徇へて佛南を犯した。

今や「ナポレオン」は國民の輿望を荷ふて立つて「フランス」統治者の地位に居るに至つた、其の抱負と其の經綸は心のまゝに實行することが出來る、兩副統領は補佐の役であるが彼の爲めには屬僚に過ぎない。彼は萬人推戴の誼に報ひんが爲めに滿腹の才能は一に國家の整理に傾斜した、柔軟なる政府を鞏固にし紊亂せる稅制を絲一し其の他內治に力を致すと共に平和は彼の望みであつた、彼の第一統領となるや直ちに英、普の兩國に向けて書を送つた、彼は一つに平和を望む

で多年疲憊せる國民を慰撫すると共に「フランス」文治に彼が曠世の大抱負と大經綸を行はんと期したのであつた。

彼は英帝に書を寄せていつた。

過ぎし八年の慘絕なる戰爭は、猶ほ此の上にも苦鬪惡戰以て何日迄も持續せざるを得ぬだろうか、如何にかして迭に相握手するの方法はないのだろうか、安寧と獨立とを保護する限度を越ゑて富と權とを有する國民が蒼生の安慰と商業の發達とを鬪諍の神が犧牲の祭壇に供へねばならないものだろうか、此處に平和を齎す者は最大の名譽、無限の恩惠、一つは受け、一つは授くるものであることを列邦の政府の理解し能はないのはどうしたわけなのだろう、之れ即ち陛下の省慮を煩はすに至つた次第である、云々。

彼はたゞ心よりして平和の宣傳者を以て任じて斯くは胸襟を開いて

其の友誼の回復に努めた、彼は同樣の意味の文章を普國にも友邦の誼を全ふせんとのぞんだ、彼は先づ英國の意嚮の果して和平にあるや否やを試みた、若し英國にして一片情誼を解したらんには禮を以て之に答ゆべきである、「ナポレオン」は先づ意嚮をきいて次で條約を講ぜんとしたのだ、條約に於て其の互に讓る能はざるものがあるならば即ち慘は慘なりと雖も再び釁を構ゆるも可なりであるが、徒らに假面を裝ふて獰好常に毒牙を磨くに汲々たる英國の政府は此の大英雄が宏快なる提議を容るゝことはせなかつた。

英相「ピット」は「ナポレオン」が過去の經歷の上に千百の缺點を數へて。「ナポレオン」の政畧は歐州大陸の君主制と宗教とを破壞せずんばやまざるものであると難じて英國政府は之等に對する明白なる悔悟の証佐として償ひの適應なる報として「ブルボン」王室の復興を見ざる間は

「ナポレオン」の和睦の申出に對して信を措くに至らざる旨を申し送つて來た、禮を欽けるは英國の回答である、平和の宣傳者は却つて陋劣なる英國政府より王位の簒奪者を以て罵られた、たゞ衆庶、たゞ國家、之を思へばこそ彼は脾肉の躍るを堪へ心中の虫を殺して平和を覓めたのであつた、常日頃美しき紳士の仮面を被りて善き名に隱れ貪婪飽くことなく蚕食を事とせる英國は此處に其の陋劣なる心情を思はず吐露して愈々本音を吐いた、之をきいた「ナポレオン」は憎むべき英國の妄狀に對して再び何事をも語るを潔とせなかつた、彼は叫んだ、一國が他の國に對して強て求むる所を遂げて平和を覓む、如奈ぞ和平の來ることがあろうに、妄狀にして不明なる英國は吾等が何の故に事此處に及べるかを解せざるか、彼我民庶の悃苦を思ふて切なる心情を解せざるのみか、臭汚なる其の本音を吐いて、善く

も日頃の高言に恥ざることよ、あらず茲に及んでなほ辭令を飾つて其の陋を被はんとする心根の汚らはしさや、眞情却つて仇となつて咄英國は吾が民庶を辱しめぬ、吾が共和政を罵りぬ、さなり、此の絶巨の大手腕、此の千鈞の大鐵鎚、見よ遠からずして爾英國の頭上に不安の夢を醒まし呉れん……と、「ナポレオン」は怒髪倒に立てゝ嚇怒した、而しながら「ナポレオン」の態度は何地迄も痛快である、迫らず、騒がず、彼は靜にペンを執つて「ビット」に答へて曰く「吾れ若し「スチュアーツ」王位の復興を見るにあらざる限り、斷じて英國と和せずと主張せんには足下抑も吾輩を指して何とか言ふ!?」と、僅々數句、何等の痛快、何等の壯絶、實に千萬語に優る幾等、醜奴の膽を奪つて再び何事をも語る能はざらしめた、佛共和政の改革せざる限り英國和を講ぜずとならば英國拜跪して「ナポレオン」の脚下に鰭伏し

て和を請ふ迄は佛國も亦敢て和平を覓めない迄である、一度は民庶に盡さんとした、今は何をかも顧念せんやである、「ナポレオン」は劍載を執つて立つた、面白し、吾が劍は腰に鳴れり、とは其折の彼の叫であつたろう。

英國は遂に齡すべからず、墺國また英に結んで佛の南方に迫つた。彼は精鋭の兵を股肱の將「ムラ」に授けて「スワヒア」に向はしめた、幕下の名將「マッセナ」を伊太利に遣はした、而して彼は躬ら「サン、バーナード」の高處より急轉直下して「ロムバーデー」に兵を進めた、彼は「シスアルピナ」共和國を再興した、六月十四日「マレンゴー」に激戰して大に克ち再び伊太利を征服した。「スワヒア」に向つた「ムラ」は墺軍を追擊して「ダニューブ」河を渡つた、佛軍の勝利の報は連りに傳へられた。佛將「モロー」もまた上獨逸を蹂躪した。

墺國は疲弊の堪へ難さに幾度か和を講ぜんと企てたけれども一方英國との盟約のあるあつて遽に之を棄て兼ねて「フランス」の軍門に白旗の使を送るに躊躇した、「ナポンオン」は迚ても平和の望むべくもあらぬを見て精鋭勇悍なる兵を率ひて「ホーヘンリンデン」に重圍の陣を張り。奈翁幕下の將「マクドナルド」をして「スバルヂン」を横ぎらしめた、恁うして「ムラ」の軍の大勝と伊太利に於ける佛蘭西軍の成功とは遂に頑強なる墺國政府の我慢を挫折した、千八百一年二月九日には彼の有名なる「リユヲキル」の條約に調印せしめた。

墺地利は「トスカ」を「ハルマ」に、「ライン」河西を「フランス」に割與した。「バタキア」、「ヘルベチア」、「シスアルピナ」、「リグリア」諸共和國を認めた。

古神聖羅馬帝國は其の實こゝに亡ぶに至つて、此て土地を失ふこと二萬五千餘方哩、民を失ふこと三百五十萬に達した。

「フランス」は「トスカ」を「エトルリア」王國と爲し、西班牙に與へて「ルイシアナ」と代へ、つぎて「ナポリ」と和を結んだ。

列國は今にして「ナポレオン」の奇智英才に尊敬を拂ふに至つた、彼は只管に平和的施政を欲して經綸を行はんとした、此時に於て英國は獨り深怨を「フランス」に抱いて嫉妬と憎惡の念を去らぬのであつた、が大勢既に上の如くであつてみれば兩國の確執も頓ては解くるの日が來る、其の年の三月露帝「パウロフ」殂し「アレキサンダー」二世嗣いだ英王「ジョージ」三世も今や屈して和を覓むるに至つた。

千八百二年三月二十七日各國の使臣「アミアン」に會して物々しき談判の結果、和約は確議せらるゝに至つた。

戰爭の煩苦に飽ける各邦の君臣は茲に於て初めて平和の天を仰いで歡呼するに至つた。

國境の鎖鑰は解かれた、友邦の誼は復に回つたが、此の平和、此の邦誼が何時迄か續くだろうに、風收まつて雲開く、天候回復の喜びは一刻にしてそは頓て來ん腥雨慘風荒れに暴れて地を襲ふ前兆ではあるまいか、而しながら戰禍に飽いた國民は喜んだ。

第十三　ナポレオンの經綸

平和は回復せられた、全歐の天地は今日よりして春は花に唄ふべく、秋は月に嘯くを得るに至つた。

「アミアン」の條約に於て英國はたゞ西領「トリニダト」、「バタヤア」領錫蘭を得て其の他の侵畧地は悉く之を返し、「フランス」が建設せし「バタヤア」、「ヘルベチア」、「シスアルピナ」、「リグリア」の四共和國を認め、「フラ

ンス」また兩「シチリア」羅馬法王領の兵を撤して埃及を土耳古に返附し露土兩國の建設せし「イオニア」共和國を認諾することゝなつて、さしもに紛糾してゐた禍亂も茲に根絶して干戈漸くに收まるに至つた。

「フランス」は英國と和して初めて再び海上の交通を得るようになつた、「ナポレオン」は內に積年戰亂の創痍を治癒に努め、宿昔夢寐に來往せし滿腹の經綸を實旋した、「ナポレオン」の望む所は國利民福の增進にあつた、國家百年の礎臺を堅うするにあつた、彼は絶代の才能と智力とを擧げて內治につくした。

彼は斯くて一面內政文治の功績を擧ぐると共に海外殖民經畧の素懷を復活して「フランス」の勢威の發揚を期した、彼は「アミアン」條約に於て「ルイシアナ」を復し西印度諸島を得たが「ハイチ」西部の黑奴の自立せるありて兵二萬を遣して之を誅伐せしめた。

彼は革命時代に國外に走つた勤王黨の志士四萬餘家を召還した、鮮血なほ滲む戰慄すべき革命の遺物たる刑臺を毀ちて獄門を閉鎖し、黨爭を停めた、渠は革命時代に分裂した教界の統一をなさんとして羅馬法王「ピオ」七世を擁立し、加特力教の復興を圖つて僧官を任命した。

道路の改修、津梁の修繕をなし、港灣を開いて交通通商に便にし、殿堂社寺を建築した、學校、圖書館、博物館、美術館を創めて革命時代に荒廢して其の儘になつてゐた、諸般の設備を振興した、斯くの如く百工百藝の發達と進歩に力を致して百般の事績著大の見るべきもあつたが中に「ナポレオン」の平和的事業として天下に益し後世に傳へらるゝ最なるものは所謂「コード、シキル」の編纂である、「ナポレオン」法典は歐州列國法典の範となり、自由主義の發達を資けて多大

の功のあつたものである。

而し「フランス」法典の纂修は夙くも革命時代に之が緒を發してゐたが干戈日に動き、劍戟の響絶ゆるの時なき擾亂の際として事績進捗せずして今に至つたのであつた、が「ナポレオン」權を廟堂に執ると共に直ちに之が完成を急いだ。

彼は先づかの「ルイ」十六世刑死の時に之が辯論に盡せし「トロンシエー」を法典纂修の總監となし、名士大家を大に會して星を重ぬる四度、漸くにして其の業を成した、「コード、シキル」は實に「フランス」の古俗慣習、羅馬法の理論、革命の本旨を參酌し、凡て封建の遺習を脱し、法律上の平等を期したものであつた。

千八百二年八月二日、「ナレポオン」は議院の提議により國民の推戴を享けて三百五十萬票を以て終身總統領となつた、彼はついで「シスア

ルピナ」共和國の總統を兼ね、「リグリア」共和國の憲制を改め立法代議兩院の權を削つて遂には凡ての權威を其の掌中に執るに至つた、彼は今や名は終身總統領といへども、其の實は帝王の權勢を握つてゐたのであつた。

「チュイレリー」王宮に於ける此の時の「ナポレオン」は最早や帝王と何の撰ぶ所がなかつた。

第十四　ナポレオンの帝政

嘗て「ナポレオン」を目して王位簒奪者を以て呼んだのは英國であつた和議ならんとせし時、「フランス」の厚意に酬ゆるに侮辱と漫罵とを以てしたのも英國であつた、陋劣なる本音を吐いて幾度か平和を誤つ

たのは英國の罪である、大勢の赴く所また如何とも詮方なくして始めて和議を結んだ英國は何地迄も横着である、倨傲である、と共に嫉妬は英國の特有物である、「フランス」が急激なる進歩と益々旺盛に赴くは英國の堪へ難き所である、隙を窺つて「フランス」の權勢を殺んが爲めに英國は腕を扼して監視を怠らない、權力の均衡とは英國が嫉妬心を飾る被布である、英國はまたも醜陋なる生地を露はして慘禍の因を呼んだ、「アミアン」の條約は「イギリス」によつて破られた、野心、横暴、嫉妬、破壞等自國に屬する凡ての罪を「フランス」に被せて漫罵、侮辱至らざるなき英國は辭令に其の穢汚を包まむとして其の凡てを事實に示すに至つた

「イギリス」は其の自ら調印せる條約の實行を遲延した、其の條約に於て英政府は埃及と「マルタ」を棄てる筈になつてゐた、「ナポレオン」は恊

約の通り「チープル、タレントー」及び羅馬の二三州を棄つべき約定を二ケ月以内に履行した、英國は幾月の後に及んでもなほ「アレキサンドリア」、「マルタ」等の衞兵の撤去をなさゞるのみか遂には吾れ之を棄つれば佛國代つて畧取せんとの理由の下に撤兵に不服を申述ぶるのみならず、條約破棄を宣するに至つた。

「ナポレオン」は重なる英國の妄狀暴慢に一度は怒つた、迚ても彼我何れか倒るゝ迄は平和は望むべからざるを思つたが、彼は尙ほも厚意を各國平和の事に寄せて直ちに劍を執ることをせなかつた、彼は駐佛の英公使に干戈を動かすべき理由なき旨を語つて本國政府の反省を促さん事を求め、自家の平和を思ふに切なるを告げしめた、が如何に和親は彼の望む所なりとは雖、條約不履行の英國とは握手することが出來ない、「ナポレオン」は。

「尠たる「マルタ」の一小島に何程の價値があろう、が其處には神聖なる條約がある、佛國の名譽は其處にかゝつてゐる、英國は正道を踏むで之を棄てねばならぬ、若し條約を破つて歐州の二大國が之を知らざる風するあらば、目して世界は何といふだろう」

といつて言を低ふして反省を覓めた。

けれども詭計猾智なる「イギリス」政府は言を左右に托して聞かない。

英政府は列强の盟約を恃んでゐる、何日かは「フランス」敗亡の期あるべきを思つてゐる。

英國は「マルタ」島を占有して「バタキア」、「ヘルベチア」の佛兵撤退を迫るの暴に出でた、千八百三年五月、「アミアン」條約の後一年餘にして佛英兩國の和誼破れた。

「フランス」共和黨は、此の頃「ナポレオン」が主權を掌握するに甘んぜず

して反抗を試むるに至つた、遂には弑逆を企つる者あるに至つた、彼には未だ爲さざるべからざる事がある、隱謀は早くも露はれて却つて恐るべき害毒の根を絕ちて「ナポレオン」の帝政を早うするに至つた。

「ナポレオン」は內外の形勢危きを觀て共和政の弊となし、五月十八日元老院は其の旨を承けて共和政を停め、國民をして皇帝を撰擧せしめた、此の時「ナポレオン」は三百五十七萬二千三百二十九票を以て國民の推戴する所となつた、此の時他の群小を投票した數は二千五百六十九票であつた、以て國民の如何に「ナポレオン」を渴慕するかゞ知れる、「ナポレオン」民庶の推戴を得て皇帝となるや羅馬法皇は巴里に飛錫して十二月二日「ノートルダム」の寺院に於て戴冠式を行つた。「ジョセフイン」もまた王宮に國母の冠を戴く身となつた、此の時の戴冠式

は實に空前の盛事であつた。

「チユイレリー」王宮より「ノートルダム」に至る順路一里半、步兵は兩側に路傍を警衞してゐる、花々しく盛飾した一萬の騎兵は八領立の馬車の前後左右を警固して威風堂々と行く、群集幾百萬沿道に今日の盛儀を見物せんとて寄り來つて古今未曾有の壯觀を呈した、斯くて「チユイレリー」王宮より「ナポレオン」と「ジョセフイン」は馬車で出で。般々轟々たる祝砲につれて群集歡呼の中を「ノートルダム」に着いた。螺旋形の階梯二十一級其の上には深紅の龍蓋を懸けて玉座は設けられてある、奈翁と「ジョセフイン」は玉步緩やかに玉座についた、軍樂に和して頌歌するもの三百餘人喨々たる音樂と共に綺羅星と列ぶ群臣歡喜の中に戴冠式は始まつた。

遠く飛錫したる羅馬法王は王冠を捧げ出て進むで新帝の頭上に戴か

しめんとした、「ナポレオン」は即ち法王より之を引きとり。

神之を吾に與へ給ふ、予の外何人と雖も之に觸るゝこと能はず。

と叫んで自ら頂上に戴き、次で「ジョセフイン」の頭上に手づから戴かしめた、斯くて殆んで四時間を費して壯嚴なる式は終つた。

それより一ケ月國内上下はたゞ祝賀に狂喜して騒いだ。

それより「ナポレオン」は「シスアルピナ」共和國を王國に改め千八百五年五月八日皇帝皇后相携へて「ミラン」に幸し、同月二十六日其處にて即位の式を擧げて伊太利王位に即いた、また「リグリア」共和國をば「フランス」に併合した。

今や「ナポレオン」は「フランス」に帝となり伊太利に君臨し、巨然歐列邦を睥睨した。

此に於て墺、露、英、瑞典等盟を約して第三聯合軍を起した、「ナポ

レオン」は「スペイン」と連り兵二十萬を發して東征し。十月「ウルム」を拔き、妹「カロリン」の婿「ミユラー」は維因に入つた、將「マセナ」は墺軍を伊太利平原に破つて戰慄すべき慘禍を現出した。

十月二十一日、英海軍提督「ネルソン」の爲めに佛、西連合海軍は「トラファルガー」に敗られて「フランス」は海上權を失つた。

十二月二日獨、露兩帝と「アウステルリラ」に戟を交へて之を敗つた。

普、墺何れも和を請ひ、「バイエルン」「ユルテンベルグ」諸侯は「フランス」を助けたによつて王國に列した、斯くして十二月二十六日「ブレスブルグ」の和約はなつた。

英相「ピット」は之をきいて痛恨の極、病を重うして千八百六年一月に死んだ、全歐の邦國善く「フランス」に抗するものなきに至つた。

此に於て「ナポレオン」は兄の「ヨセフ」を「ナポリ」王に妹婿「ミユラー」を「ベル

グ」王に弟「ルイ」を荷蘭王に封じた、また「バイエルン」、「ユルテンベルグ」二王、「バデンヘッセン」、「ダルムスタット」、「ベルグ」公以下諸侯を連ねて「ライン」連衡を組織して自分で其の盟主となつた。

八月六日に墺帝「フランツ」二世は「ドイツ」皇帝兼羅馬王の位を辭したので神聖羅馬帝國の遺圖は此に瓦解して終つた羅馬皇帝の系統は空しくなつた。

普王「フリードリヒ」三世は新興「ナポレオン」帝國の勢、逸獨を威壓するに忿怒して兵を起して戰を挑むだ、が內に資力の缺乏不足勝ちなる上に外に普軍に呼應する國がなかつたので、十月十四日に「エーナ、アウエルステット」に敗績してまた振はない、「ナポレオン」は進むで伯林に入つて翌十一月二十一日大陸條例を宣布した、彼は此の條例に於て大陸諸國の英國と通商することを禁じた、彼は條交の禁止によつ

て英國の窮迫を期したのであつた。

「ロシア」は普を助けて兵を發し、千八百七年二月七、八の兩日「フランス」の軍を「アイラウ」に窘しめたが五月になつて「ダンチヒ」陷落し、六月には「ロシア」の軍は「フリードランド」に破れた、斯くて翌七月の七日には露と、八日には普と和約を「チルシト」に結んだ。

「チルシト」の條約に於て普國は「ライン」、「エルベ」河間の地を割讓した。

「ナポレオン」は其の弟「シエローム」を封じて「カッセル」に居らしめ、「エストフアリア」王と爲た、また、千七百七十二年の第一波蘭分割に於て「プロシア」の得たる地は「ワルシアワ」公國と爲て、露佛の同盟はなつた、十一月に將「ジユノー」をして葡萄牙を討たしめた、葡萄牙は元來英國と厚かつたので大陸條例を犯したのであつたが「ジユノー」到るに及んで一支へも出來ずして、時の王「ジョン」四世は家を擧げて海に浮び遠

く國外に逃れた。

其の頃の「スペイン」は甚く衰へてゐた、國王「カーロス」四世は愚愚であつた、妃の「ルイサ」は寵臣「ゴドイ」公と事を用ひて王子「フェルナンド」一味の者と相軋つて何れも「ナポレオン」を後援に仰がんとしてゐた。

翌八年の春「ゴドイ」公の請によつて佛兵十萬は西班牙の北境を犯した。

「ゴドイ」公が王に勸めて「アメリカ」に奔らしめんとするをきいた國民は憤然蹶起して「ゴドイ」公を幽閉し王に迫つて位を「フェルナンド」七世に讓らしめた、三月に佛蘭西の將「ミユラー」が國都に入ると、前の王「カルロス」四世、新王「フェルナンド」七世相共に「ナポレオン」を「バヨンヌ」に訪ふて哀求怨訴した、彼は即ち兩王を拘禁して「ナポリ」王なる兄「ヨセフ」を呼んで「スペイン」王に封じた、而して「ベルグ」王なる妹婿「ミユラー」を「ナポリ」王に移封した。

國衰へて兵に精兵なしと雖、も國民には血もある恥もある、兩王幽囚の難に逢ふて國亡ぶるも偷安徒らに默するには殘んの精氣が强よ過ぎる、半島の民は義に動いた、慷慨の士は立つて愛國の至誠に殉せんとして同志を募つた、「イギリス」は兵を送つて半島を助けた、「フランス」の軍は此に半島を攘はるゝに至つた。

佛軍の障碍をなすは常に「イギリス」である、「ナポレオン」は乃ち諸王侯を會して、「ロシア」をして墺地利を制肘せしめてゐいて、彼自身には二十五萬の精銳を率いて南征の途に就いた、佛軍進む所に英兵の影消ゑて再び「フランス」は半島に威を振ふた。

「ナポレオン」が南征の途にある虛に乘じて、「オーストリア」は資を「イギリス」に仰いで兵を起した、「ナポレオン」は將を「スペイン」に止めて置いて九年一月東に向つた、七月五日「ワグラム」に於て墺將「カール」と會戰

した、多くの兵を失つて翌六日に之を破つた。

そうしてゐる内に墺國の閣僚に更迭あつて「メッテルニヒ」の相となるに至るや和を覓めて來た、依つて十月十四日に「シエーンブルン」に於て和した、そして「イストリア」、「ダルマチア」の地を得ることになつた。

と共に佛を助けた「バイエルン」、「ロシア」にも「オウストリア」の地を割與せしめたのであつた。

恁うしてる隙に乘じて「イギリス」はまたも「ポーチユガル」を助けて兵を起さしめ其將「エルスレー」は七月に西班牙王「ヨセフ」を擊つて之を破つたが、其の時西國に殘つてゐた「スルト、テー」等の精鋭の至るに及んでは退くの外なかつた。

事毎に姑息奸惡の手段を弄して虛を窺ひ隙に乘じて小闘を企つる英國のみが海を恃んで僅に反抗を續くるあるのみで歐州の諸邦は何れ

も「ナポレオン」の武威に屈するに至つた。

嘗ては「コルシカ」の一追放人として一介の身を置くに所なく窮迫世を果敢なむだ大頭白面の零落の兒、征塵の憂きに慣れて半生を多く彈雨の間に送つて贏ち得たる所は即ち今日の成功であつた、一代の抱負は今や心の儘に行ふことが出來る、彼の軍行く所進むの地には敵がない、彼は今や全歐の覇權を掌握した、大陸の諸强國は彼の前に拜跪して和親を覓むるに至つた、が渠の名、渠の權、彼の勢望は一世を曠うするあるも里を洗へば「コルシカ」の貧乏貴族の腕白息子であつたのだ、彼は强て俗惡なる手段の下に帝室の尊嚴を加へんと期した、「ナポレオン」の大と雄とを以て兒戲に等しき手段を回して區々たる族級沙汰にて尊嚴を四海に得ようとしたのは謬りであつた。

「ナポレオン」は女帝「ジョセフイン」に兒なきを名として離別し、千八百

十年四月墺帝「フランツ」の公主「マリア、ルイサ」をたてゝ皇后とした、彼は傅倖の佳人「ジョセフイン」をして破鏡の悲嘆に泣かしめて自分は政畧と野心とに動かされて「マリア、ルイサ」と婚するに至つた。

相逢ふの其の日、何れは短かゝるべき戀の壽命に泣いた「ヨセフイン」は今は良人が野心の犧牲と棄てられて、なまじいに現在の榮華を怨まぬばならぬ身となつた。

「ルイザ」の出は高くもあろう、彼の爲めには政畧の存ずるあつたろう、而しながら「ジョセフイン」が今日迄陰に良人を扶けて「ナポレオン」の勢威を加へ、地盤を鞏固にするに與つて力あつたことは爭はれぬ。

彼が成功の半面には「ジョセフイン」の誠實の輝がある、「マリア、ルイザ」は果して此の誠實と此の大伎倆とを有してゐるだろうか。

將相臣僚は女帝「ジョセフイン」を傷みて奈翁の爲す所を悅ばなかつた

其の人を信じ、其の智、其の才、其の能に待つある國民に對し「ナポレオン」が迂蒙なる尊嚴沙汰に迷ふたのは謬りであつた。

姓氏畢竟何するものぞやである、天下は「ナポレオン」の尊嚴なる威容に服したのでない、姓氏を詮議して「ボナパルト」家に忠勤を盡したのでない彼の精氣失せず、彼の膽度消えず、深謀勇悍、滿腹の經綸を抱いて不斷不撓の奮鬪努力を續くるならば、渠は神明の如く、渠は妖魔の如く、崇ばれ、拜まれ、敬まはれ、怕れられるのであつたが名と權とに醉ふた彼は遂に萬慮の一失、惜しむべきことをした。

第十五　帝政の没落

「ナポレオン」權を大國に握つて威全歐を壓するに至つた、其の劍よく

大陸を雌伏して經綸を四海に澤せんとした、が果然、事は內より起つた。

彼の弟、荷蘭王「ルイ」は千八百六年の大陸條例の國力を害するを厭ふて、王位を擲つて「オーストリア」に奔つた。「ロシア」、「ドイツ」、「ゼーデン」等の國々も條例の弊に「悃しみ弱」らされてゐた、「ボンメルン」は第一に之を破つた、禁を犯して海に英に通じた、時しも「イベリア」半島に於ては英將「ウエリントン」の戰に努むるあつて、事を東北に省みるの遑がない。

「サクセン」の「ワルシアワ」公が西「ガリチエン」を得たのを見て露帝「アレキサンダー」は波蘭の復興を懼れて中立國の船の爲めに諸商港を開き「フランスの貨物に重稅を課した、そして千八百十二年に「ゼーデン」王「ベルナード」と連つて「フランス」に敵抗した。

事茲に到つて「ナポレオン」は叫んだ、友邦の誼を棄てゝ全歐統一すべきの機運は熟せり矣と、彼は好機の來れるを喜んだ、唾手一番して「ナポレオン」は奮起した、群小の鼠輩事を謬るは久しゝ見よ今にして獅子王が怒號の凄まじさを知らしめんとは彼の意氣であつた、臣僚の諫諍、將相の苦諫、容るゝには餘りに熱してゐた、聞かんには餘りに狂ふてゐた、彼は北征を企圖した。

十二年五月列國の兵を「ドレスデン」に會した、凡て四十餘萬、砲千二百門、後諸路の軍、來り會するに及んで五十五萬餘に達した。

六月「ニーメン」江を渡つて「キルナ」を取るに及んで衆六十萬を越ゐた。

「シユワルツエンブルグ」を墺軍の將として右翼となし、「マグドナルド」を普軍に將として左翼となした、旗鼓堂々既に全歐を威壓してゐた八月「スモレンスク」を陷れた、墺軍は「ヲルンスク」を普軍は「リガ」を取つ

た、意氣愈々昂ッて軍容大に振ふた。

九月七日露將「クッソフ」を佛軍「ボロヂノ」に敗つて之を追擊した。「クッソフ」は「モスクワ」の守兵を激して沿道の野を清めて退いた、「ナポレオン」の軍相踵いで入府したが全府人あるなく資給を斷たれて困るしむだ、折りしも十六日に大火起ッて延燒五日また如何ともせん樣なかッた、極度に迄達してゐた意氣かくて衰へ、士氣昂らなくなつてきた。

十月「ナポレオン」は兵を率いて西南に退いた、時に大雪降るありて、風土に馴れぬ軍人征馬多く斃れた、雪に惱み、窮乏に困しめるに乘じて「ロシア」の軍は攻擊を始めた、遁のナポレオンも此に至つて惆悵たらざるを得ない、能く戰ひ、善く防いだけれども敗亡は數のまぬがれざる所、脆くも潰走したのであつた。

十一月二十七日「ベレジナ」河を渡つたときには「ナポレオン」の兵は僅に二萬餘であつた、「フランス」に於ては國民鶴首して勝報を待つてゐる。民庶は「ナポンオン」を信じてゐる、俄然哀しむべき敗績の飛報は傳へられた、流說蜚語は喧々として國民の面に暗愁の深くも閉すをみるに至つた、訛傳は訛傳を生むで物議ようやく騷がしくなつた、我軍殲せられて皇帝「ナポレオン」征途に殂すとの聲は何地からともなく傳へられた、國民の震駭は非常であつた、「フランス」の天地は昏くなつた、暫らくは暗默の內に沈むで世は燈の消ゑた如くになつた。

此の時「ナポレオン」は迅驅星馳軍を棄てゝ國に歸つた。

皇帝歸り來る、「ナポレオン」歸來す、の聲は忽ちにして巴里全士に傳へられた、擧國狂喜、敗軍の皇帝を迎へて歡呼した、日ならずして新軍集まるもの五十餘萬、意氣再び大に振ふた。

千八百十三年七月墺相「メテルニヒ」は「プラグ」に列國を會して和を講せようとしたが奈翁は條約に不利ありとして讓らず、事は水泡に歸した、「ナポレオン」一度敗れてからは列國はまた彼を恐れない、彼の軍再び旺なりと雖も列邦は敢て驚かなくなつた。

八月に墺、露、普は軍資を「イギリス」に得て相連つて「フランス」に敵した、而して進むで「サクセン」に迫つた。

十月十六日「ナポレオン」兵十六萬を率ひて連合軍二十五萬五千を迎へ、「ライプチヒ」に戰ふ三日、またも敗られて巴里に歸つた、其處で「サクセン」王は擒となり、「ジエローム」は出奔して、「エストフアリア」王國は覆り、千八百六年來の「ライン」連衡は茲に至つて瓦解した、「イベリア」半島は英將「ウエリントン」の畧取する所となり妹婿「ミユラー」は彼に叛いて墺地利に通ずるに至つた。

一度手傷ひし獅子王の氣炎は再び昂るに由なかつた、勝に乘じて聯合軍は「フランス」の邊境に迫つてきた。「ナポレオン」は手兵を率ひて之が防戰に努めた、苦戰三ケ月彼は遂に勢盡きてしまつた。

千八百十四年三月下浣巴里は連合軍に陷された、「ナポレオン」は衰餘の兵五萬を以て之を救はんとしたが形勢既に定まつて彼の威令行はれず、之あるに至らずして止むだ。

四月六日、あわれ一代の風雲兒も「フオンテヌブレウ」に於て「フランス」主權を擲つの餘儀なき羽目になつた、連合軍は「ナポレオン」を「エルバ」公に封じて歲額二百萬法を「フランス」政府より給せしむることゝした、

「ナポレオン」の帝政は此處に沒落した。

五月三日に「ルイ」十六世の弟「ルイ」十八世巴里に入つて王位に即いた。

翌四日「ナポレオン」は痛恨の涙を呑むで「エルバ」に流竄せられた。

彼は此の時に於て人情の輕薄に泣いた、雄圖も今は夢語りと化して「フランス」大皇帝は今日流人の身となつた、浮世は何れ恁うしたものであるとしても酒興の伴に榮華の倡に多くの將士は訓陶してはゐなかつた筈だのに一敗我が軍の意氣沮喪するや、恩人の沒落漂零を他所にして利につき名に奔り强きに賴る淺間しの人情の曲折轉變に言ひ知れぬ忿恨と哀寞とを感じたのであつた。

無限の怨みを含むて「ナポレオン」は「ポルト、フアテジョー」に於て「エルバ」公として幾月を送つた。

第十六　百日時代

果敢なきは轉變常なきの人事である、恃むべからざるは人生の春の

生命である、「コルシカ」の追放人の末路は「エルバ」の流人である。「アヤウシオ」の貧乏貴族の最後は「ポルト、フアテジョー」の宮守りで充分なのだろうか、「チユイレリー」王宮華榮の夢はさめて「エルバ」の秋に地中海の風は寒い、昨日百萬の精鋭を提げて全歐の天地に飛翔した大英雄は今日は二十餘哩の周圍を有する小島に一萬前後の島民を相手に詫びしい日を送らねばならないのであつた。

僅少の從者と家親を從へて此處に流謫の憂きを嘆つ「ナポレオン」は世にすてられ人に棄てられ神にも見離されたのだろうか、何れにしても遠島の流人が送る世間は狹い。

「ア、何人か予がある島の餘りに小なるを拒むものがあろう!?」

月に恨みあり、花に涙あり、斷雲急がしく飛ぶ北歐の空、其處にも痛憤のあるものを吾れ斯くて死なるべきや、とは「ナポレオン」の苦衷

であつた。

勝ち誇つたる列強は「パリー」會議を開いて「フランス」の領土を千七百九十年の舊態に復へした、九月維因會議を開いて積年變亂の善後策を講ぜんとしたが決せない、論議頻出、是非決し兼ねて徒らに日月を重ぬるのみであつたが、利害の乖背は群小の裁斷する所でないから迭に虛勢を張つて讓らず、またも干戈を動かさんとするようになつたが、肝心のゴ本家「フランス」は恁うしてる間に復興されたる「ブルボン」王朝に慊らないで民心動搖して何となく雲行が怪しい、不平の徒黨がある、危激の分子がある、「ナポレオン」の餘黨は陰に微笑だ、彼等は形勢の赴く所を察して窃かに「エルバ」に通じて舊主を招いた、維因會議に列國の不和あり、本國の民心新王朝と融けずときいては「ナポンオン」は躍つて此の機に乘ぜんとした。

千八百十五年二月二十五日流島「エルバ」を脱出した、三月一日「カンヌ」に着いた、二旬にして巴里に入つた。

「ナポレオン」は大膽であつた、彼は不敵であつた、孤身飄然として「エルバ」より脱走し來つて「フランス」に上陸した、其處には自己が敵なる帝王がある、政府がある、軍隊がある、彼は運を天に任して、而しながら彼は國民の好意を有するを堅く信じてゐた、人民の感情の中に其の身を投げ入れた、彼の唯一の心恃みは民庶の愛慕のみである、岸頭に彼の軀倭を認めて其の周圍に集まつたものは普通の人民であつた、彼は市端の地に天幕を張つて前途の命運を占つた、之を見た る市民は泣いた、叫んだ、オ、吾等の救世主は再び降臨せりと絶叫は傳へられた、群集は彼の前に跪いて彼の歸來を喜んだ、樵者農夫に圍まれて「ゲンノーブル」に着いた時、城門堅く鎖ざされて市内に入

ることが出來なかつた、門番は入府を拒むだ、兵士は吾友來れりと叫んだ、頓て喧騒は門内に始まつた、彼は軍隊の出動なるべしと覺悟した、提身故國に歸つた彼には之等の覺悟は迅くからしてゐた、と見る城内の住民六千は「ナポレオン」來るの聲に立つて手に手に獲物を携へ門扉を守れる兵士を脅して門を開いて「ナポレオン」を迎へるのであつた、狂喜せる人民は泣いて喜んだ、彼は群集の肩上に擔はれて遂に「リオン」に着いた。

「リオン」の門も鎖されてある、望臺には劍戟の閃くのが見る、彼に從へる民人と兵士は之を破ることが出來るが、彼は之を打破ることはせなかつた。

彼は悠々として馬を驅つて城門に近く進み寄つた。

鬚日の佛蘭西皇帝「ナポレオン」、當時「エルバ」の流人の身、一兵一卒

も率ゆる能はないから市民の軍を組織して巴里に進まんとし、今こゝを通過せんとするのである、予を通過せしむると否とは一つに諸君の意志と權力にある、劍を拔かんとならば拔くもよし、銃を放たんとならば發つもよし、予には一卒なく一門の砲もない。予は諸君に反抗する能はぬ、否諸君と戰ふも欲せない、諸君にして予に敵する限りは予は「フランス」皇帝たることは出來ない、予は寧ろ此處に諸君の手に斃さるゝを願ふものである、多言する要はない、抗せず、叛かず、予は運命を諸君の掌中に托するのである。

其の聲は悲しい、其の音は強い、兵士は耳を澄まして之をきいた。

きくや直ちに「吾皇帝來れり」の絶叫は全市を壓した、此處にも兵士、市民は喜んで彼を迎へた、討たるべき彼は討つべき兵士によつて守られた。

彼は孤身上陸して途に恁うして兵を得た、彼は國民歡呼の中に送られて「パリー」に入つた、「フランス」全土は今や「ナポオレン」の前に再び跪くに至つた。

「ナポレオン」の出現と共に「ブルボン」王朝の威武は地に墜ちて終つた。彼は恁うして刄に衂らず、一丸を放たず、一人を殺さずして「フランス」帝位に復した。

之をきいて驚いたのは維因の衆である、急に「ブリユヘル、エリントンをして普、英の兵を率ひて「ベルギー」から入らしめた、墺兵は「ナポリ」を攻めて「ミユラー」を破つた。

「ナポレオン」は露、墺の軍來り會せざる前に英、普の軍を破ろうとして六月十五日「ブリユヘル」を「リンニー」に破つた。十八日「ウエリントン」と「ワータールー」に戰つて殆んど克つてゐた、其處へ「ブリユヘル」の普

兵が來て英兵を助けたので遂に大敗した、二十二日にはまたも位を辭した。

七月七日に巴里が陷つたので「ラロシエール」から海に泛んで「アメリカ」へ渡ろうとしたが英艦に捕へらるゝに至つた。

事を擧げてより前後百日、彼の命運はあわれ拙なかつた、

列强は相議して「セントペレナ」に流謫することになつた。

「エルバ」の流人は「セント、ペレナ」の謫者となつて百日の壽命を故國の名殘として遠く絕島に送られ行かねばならなかつた。

曠世の雄畧は實に夢であつた、絕代の壯圖も今にして空である、吾等の英雄の末路は實にも涙多かつた。

第十七　ナポレオンの末路

「ワータールー」に彼は幸運の神から見離された、萬事休す矣。

佳人の末路に涙多く、英雄の最後には恨みが多い、二十幾年の彼が活動振は目覺ましくあつたが、孤島の六年は痛恨の極であつた、光輝ある彼が半生の歴史は一層に其の末路に命運の殘虐なる惡戯を呪はしむるのであつた。

敗殘の身を新大陸に寄せんとして英軍の手に捕へられた、彼が過去の苦闘は怨みを列國に買ふてゐる、列國は捕へたる此の獅子王の處斷について少からず迷つた、「エルバ」の例は彼の直ちに屈するものでないことを深く考へしめた、普將「ブリュッヘル」は積年の禍根を絶つ

が爲めには彼を銃殺すべしといつた、彼を刑死せしめんとする者は多くあつた、が英將「ウエリントン」等は刑死に勝る鎚棒を彼の身に下さんことを主張した、そは常に英人の特色であつた、美しき名に隱れて彼等は怨を霽さんとした。

殺すよりも半死に人を悃しむるは酷である、刑臺の露には太陽映くけれども無期の獄囚は月をも仰げない、恨み多きは死に勝る生の痛苦である。英國は其の殘忍を主張した。

「ナポレオン」は大西洋中の離島「セント、ヘレナ」に幽囚の苦を嘗むることになつた、彼は千八百十五年の秋、英艦に送られて絶島の島守となつて「ロングウッド」に住むことになつた。

熱帶の一離島、其處の高原に建てられた粗造の一家屋は「チョイレリー」王宮に一代の權勢を振つた「ナポレオン」皇帝の住居である、

樹少なうして風暑く、地は熱して砂は燒けたようである。身を容るに足る倭屋の夏は問へて送らねばならなかつた。

自然に妙趣なく、語るに伴侶なく、敗殘の身一ッを死にもまして苦るしき、佗び住みに持てあました英雄の末路は哀れ深い。

冷酷殘忍なる英國知事「ハドソン、ロー」なる痴漢は禮を解せず誼を知らず、たゞ前日の威望を憎むで苛遇酷待するのであつた。

有情の人の兒誰か偉人の末路に泣かぬ者があらう、たゞ獨り英人のみは宿怨を卑劣なる手段に霽らして微笑するのであつた。

「フランス」大帝國の皇帝は今は親書の往復さる心のまゝでない、「ナポレオン」は「ロー」の爲めには獄囚と同樣の冷遇をうけた。

英國政府の支給する二萬磅足らずの歲額を多しとして八千磅に減額さしたのは英知事「ロー」である、之の醜漢の言議を容れて小人の跳梁

を省みなかつたのは英政府である。

失意敗殘の英雄の末路をして慘を極めしめたのも英國であつた、死に勝る苦の痛苦に泣いた「ナポレオン」は何れ天壽を全ふすることは難い、而しながら英國は飽まで美しき名に隱れ、品格の假面を被つて横暴なる所斷に出でた。

「ナポレオン」が所持の什器を賣つて歲額の不足を補つたり、燃料の不足せる爲め寢臺を毀ちて焚いたりしたに關らず適れ仁慈の惠で島で天壽を全ふさしたが如く裝ふてゐたのも英政府であつた。

將卒の從ふ者稀なるのみか、家親一人も伴ふを許さなかつた、志業に敗れ、恩愛に渴して陋劣なる英官權の束縛に悶ゆる「ナポレオン」は雨に風に哀寞の怨みを大陸に寄せたのであつた。

彼は感慨の堪へ難きまゝに追憶の悲しきを語る時、死に勝る生の恥

を嘆つのであつた。ア、戰場で屍を馬革に包むだならば此の恥辱此の痛苦はなかつたろうにとは今日此の頃の悔恨の想であつた。無念骨に泌み渡るのは「ワータール」の敗亡であつた。

彼は流謫の其の日英國の爲めに皇帝なる尊號を奪はれた、將軍「ボナパルト」の稱呼は彼にとつては限りなき侮辱と感じた、彼はいつた、

「予は「フランス」の主權を棄てた、「フランス」皇帝の位はない、が凡そ君主なる者は自ら其の稱號を保持することが出來る、予は單に皇帝「ナポレオン」と稱へて居る」

と、而し「ハドソン、ロー」は本國の命なりとして苟にも皇帝なる稱號に關しては大に反對をしたのであつた。

「ロー」の如き凡愚の痴漢をして、「ナポレオン」監督の任に當らしめたのは英國の失敗であつた、「ナポレオン」が死を早むる爲めに「ロー」の冷遇

が如何に力あつたかは奈翁末路を悲む者の均しく認むる所であつた。彼が英國の處置の陋劣なるを憤つたのも無理でない、瘴癘多き絶海の孤島に殺しもせず生かしもせず苦るしめ惱まして宿怨思ひ知れと言はぬばかりにホ、ホ、笑むだ英人の冷酷と陋劣なる根性とは英國の史家が歐州變亂の總ての罪を「ナポレオン」に被せて自國の非を覆ひ彼を妖魔の如く罵つたのでもわかる。

千八百二十一年四月十五日、彼は六年の憂苦を追想して記していつた「吾輩は英國の貴族政治と其の刺客に虐殺せられて天壽を果たさずに死ぬ、英人は何れ吾輩に對する復仇をなし得よう」と、血涙を絞つて叫んだ、彼は其の亡骸を紀念して英人に酬ゆるの外なきを悲しむだ、彼は病臥幾年今にして末期の近づいたのを喜んだ。

彼の病革るや轉地の請願をしたが英知事「ロー」の爲めに拒まれて意を

果たさなかつた。

彼は遺骸を夢寐にも忘れない故郷「フランス」の「セイヌ」河畔に埋葬せんことを遺言した、その後二旬。

千八百二十一年五月五日、嵐吹く怕ろしの夕、韃靼と岸を打つ大洋の浪の響に膓を痛めながら粗末なる寢床の上に彼は死を待つた。

此の日は朝來怪しき天候であつた、斷雲去來たゞならぬ空は頓て濛々冥々と化した、雷鳴閃電天地末の日の近づけるかと思はれた。

海潮騰ること二十丈、「ナポレオン」謫居の家の背なる巉崖の一角を嚙むで行くこと前後六回、此の時に當つて沈寂語なきは「ロングウッド」の一石室の小房であつた、

臥せる「ナポレオン」の枕頭に蒼青い面に憂色を浮べて侍するものはたゞ六人、世界の悲痛は狹き一室に集められてた。

時しも右方の窓框、暴風に墜落した憂然たる響に昏睡の狀にあつた「ナポレオン」は頭を擡げ眼を刮き左手を高く翳して

「カーレ、ヴ(勇氣!!)。彈丸貫かず」

と叫んだ。

アヽ、渠の夢は此時もなほ「ダニューブ」の岸頭、「ピラミット」の邊り、伊國の平原、北歐の雪野に砲煙彈雨の中を驅けてゐたのであつた。

暴風雨に混る斷續せる聲を此の世の名殘りとして其の日の午後六時二十分、あわれ曠世の英雄は孤島落寞の裡に逝いた。

越ること三日、五月九日には「バッツゲート」の谷間に怨多き遺骸は葬られた、海上より發つ英艦の十二發の弔砲は果して「ナポレオン」の幽魂を慰め得たろうか、彼が最後の望みたる「セイヌ」河畔埋葬の遺言さえ

空や、五十二年の偉人の歴史は此處に終りを告げた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

渠逝いて十有九年、即ち千八百四十年に至り、時の「フランス」内閣總理「チエル」は國民の輿望と、英雄の遺言に基き英政府に請ふて「ナポレオン」が最後の希みなる「セイヌ」河畔巴里城下に遺骸を遷すの許を得たそこで十月「ジアンキル」親王使節となり、奈翁の遺臣と共に「セント、ヘレナ」に向ひ、月の十五日に墓を發掘した。

二十九日遺骸は「フランス」に着いて、翌月十五日「セイヌ」河畔に渠を愛慕する國民の至誠に送られて葬られた。

第十九　奈翁の人物性行

（一）　蠻人の間に邦をたつ

千八百五年の戰爭の始、佛軍「アルム」に戰つて大に勝ち、俘虜三萬を索いて「ナポレオン」の前に至つた所、彼は襟懷を披いて其等の敵囚に告げて次のようにいつた。

戰爭は偏に奇運なるものに左右せらるゝものである、屢々捷利を得ようとするには、また敵に勝たるゝことあるをも覺悟して居らねばならない、諸子今や囚虜となつて予の面前に顯はれたが之れ敢て珍とするにも足らねば何事でもない、別に諸子の大なる恥辱とすべきでもない、勝敗は武門の常であるが、常ならぬ敗亡を諸

子に敢てせしむるものは抑も誰だろう、予は當時何の爲めに干戈を動かしつゝあるかを知らないことを瞭に諸子に告ぐるものである。

卿等の君主將相は何の理由もなくして予輩に戰を挑んだのである、無意味なる挑戰と、無意義なる應戰とは何れも蠻人の所行である、而し「フランス」は一つの邦國である、予輩「ナポレオン」は一つの兵士である、邦家恥を外邦に享く、即ち戰は止むを得ない、兵望まれたならば兵士は劍戟を執つて立たねばならないのである、「フランス」國及び予輩は不幸にして蠻人の間に邦を立てゝゐるから、時としては心にもない蠻人の所行を敢てすることがある、而し之れは實に免れんとしても免れられないことである、だからして「フランス」と予輩は此の免るべからざる所行を敢てしても毫末も心中に

疚しい所はないのである、此の後如何程の惡戰を續けても、何程の艱苦に逢ふとても我が佛國は決して自分から兵を退け劍戟を棄つることはせないが、而し予輩は卿等の君主なる「ゼルマン」帝にたゞ一語忠言したく考へるのである。

「一日も早く意を平和に寄せられよ」

之だけは切に予輩が卿等の君主に對つて呈せんと欲して止まざるものである、強大なる帝國も、旺盛なる邦國も、傲慢の極度は決して好結果を齎すものでない、今にして決する所がなかつたならば恐らくは悔ゆとも歸らざる不測の災を招くに至るだろう、心を沈めて「フランス」は如何なる國なるかを思へ、「フランス」國民は如何なる人民であるかを思へ、と共に予輩「ナポレオン、ボナパルト」の如何なる人物なるかを熟考せよ、吾邦、わが人民及び予輩は徒ら

に高慢にして膽度なき君主將相の威嚇に戰き駭く如きものではない、思ふに卿等の君王將相は吾國、吾人民及び予輩の力量の程を知らず、予輩等の意嚮のある所を謬り解してゐるのであろう、余輩は歐州大陸に於て多くを求むるものではない、欲する所は殖民である、覓むる所は船舶である、何ぞみだりに列國の領土を犯す念があろうに」云々と。

彼は實に中心を披瀝して其の囚虜に告げたのである、彼は戰の無意味なるを思ふてゐる、渠は强ひられて餘儀なく干戈を動かしてゐたのであつた。

彼の希む所のものは殖民地であつた、渠は宿昔の志業として念頭を離れないのは殖民政畧であつた、彼は船舶を得て其の志を達せんとした、彼には隣邦の君主がどうして居ろうと關係はなかつたのであ

つた、列國の領域を犯して民庶を悃しむるは彼の最も心惜しとする所であつた。

が蠻人の間に邦をたつる「フランス」は他に强いられて餘儀なく劍戟を執つて以て庸愚の徒に對はねばならなかつた。

(二) ナポレオンの戰畧

軍人としての「ナポレオン」は實に古今獨歩の大將であつた、渠の軍の進む所には何物の障碍をも許さなかつた、かれは全歐の天地を蓆捲するに平野を往くが如くに兵を進めた。

かれは連合軍を邀へて駭絶の戰振に彼我の目を驚かした、

初めての伊太利征代、「アウストリア」の激戰は光榮ある戰爭であつた。

一ッは世界を驚かし、一つは自己の命運を定めた。

彼の戰爭生涯は決して短いとは言へなかつた、彼が歐列强の精鋭を蹂躙したのは僅少の歲月に成功を收めたのであつた。

六萬足らずの兵を以て墺軍二百萬と戰つて征服したるのみか自己の軍隊に倍するの俘虜を得たる、又は自己の率ゆる軍の數より以上の敵を屠りし如き非凡の技倆に天下を驚かしたものであつたのである。

が彼の戰法は實に「ナポレオン」に於て初めて行ふべくして他の以て襲ふべく學ぶことの出來ないものであつた。

嘗て墺國を討つの時、其の猛烈なる攻擊に耐へずして脆くも敗亡したる一墺將は人に語つて、

「ナポレオン」は軍法を知らず、戰法を解せざる彼と戰ふは吾等の潔よしとせざる所、吾等は彼と戰はざるべし。

といつたことがあつたが、彼は實に從來庸將の使用せし戰畧なるも

のに拘束せられて機を謬る如き迂は出來なかつたのであつた。

渠は從來の軍法軍理を擯けて顧みなかつた、彼は總ての謀策を自己の腦中から拈出した、新らしき軍理と戰法を以て光榮ある戰爭を續けたのであつた。

普通人の靴は巨人の穿つには餘りに小にして用をなさないと同じく從來の軍法戰畧は彼の爲めには餘りに迂にして用をなさなかつた。

渠は羽翼に對しては羽翼の陣を備へ、中堅に對ふに中堅を備ふる如きことはせなかつた、彼は向はんと欲する所に向ふの外に敢て何事をも省みなかつたのであつた。

かれは精鋭を一處に聚めて、或は羽翼を衝き、時には中堅を襲ひ、機にのぞんでは猛烈に敵の背後に出でた、彼は常に一所毎に陷れて順次其の全軍に及ぶのであつた、順次に破りゆく其の敏速と猛烈と

は非常なものであつて間髪を容れざるに一氣にして全軍を滅裂にして終うのであつた、彼が中堅に軍を進むる時に若し敵の羽翼の横より來襲するあるも顧みないのであつた、敵の後陣如何に弱くして陷し易うても一卒をも側面の敵に備ゆることはせなかつた。

わが後陣たとへ敵の破るに逢ふの時も彼は之を措きて進む所に向つて兵をやるのであつた、かれは志して未だ敗る能はざる間は全局の如何に對しては知らざる如くであつたが、一度一方の敵を破るや瞬時にして彼は次の攻擊にかゝるのであつた、之をも破り得るや倏忽として次に進みゆくのである、彼は恁うして全軍を潰走せしめずば止まなかつた。

獅子の兎を搏つにも其の全力を用ゆるとか、「ナポレオン」の戰ふや實に獅子の兎を搏つが如くであつた、彼は一意破らんとする敵に向つ

て敢て目的を二三にするを許さなかつた。

彼の靈敏神速なる其の活動は實に他に類例を覓むることは出來ないのであつた、かれの戰法には空虛を許さない、間隙を認めない。全力を一處にあつめて次から次に進む敏速なる行動は頓て短時間に如何なる大戰爭に於ても局末を急ぐのであつた。

彼が一方面に全心を注げりと見るのは實に瞬時であつた、彼方に向へりと思ふ間もあらせず迅くも此方に向つて來るのであつた、進鬪の終局を傳ふる頃は彼は他に敵と戰つてゐた。

かれは實に一方に全心全力を注いで戰ふと共に其の空虛、其の間隙には靈敏なる轉戰の計劃が出來てゐたのであつた、彼の戰ひ振は此に於て無謀とも見ゑた、無理とも思はれた、傍若無人とも怕れられた、と共に「ナポレオン」の戰法は猛烈であつた、慘激であつた。

「ナポレオン」一流の戰法、彼の戰振、之やこれ誠に獅子奮迅の働きとでもいふのであろう。

(三) ナポレオンの勇悍

死地にのぞむ、恰もれ轉婆娘が舞踏會に急ぐが如く、砲煙彈雨の中に立つて渠は騷がず、動せず、濟ましたものであつた。

「バリー」一揆を討つの時に渠は五千の兵を以て五萬近くの暴徒を防いだ、渠が命を領して一夜にして全く警備なつたは渠の敏活なる技倆の一端を現はしたのであつたが、大敵目前に迫るも默して騷がず、其の愈々近づくを待て一擧に潰走せしめたる其の勇悍は渠の終生渝らない所であつた。

「ローヂ」の激戰に於て危險なる橋を渡るに全軍の大將たる彼が軍中第

二の人であつた如き、「アーコラ」に於て彈雨の中に軍旗を手にして立つて動かざりし如き、「ワグラム」に於て吾兵の大部は敵の爲めに殪さるゝに至つた時、殘餘の兵を勵まして始終白馬に跨つて陣頭に指揮を續けし如き、實に渠にして始めて此の無謀と、此の大膽をなし得たのであつた。

(四) ナポレオンの雄辯

文と辯とは信なくして立たず、とは實に「ナポレオン」に於て其の實なるを見ることが出來る、渠は之によつて幾度か衰へたる勢を盛り返し、之によつて將卒を興奮激勵したこと數多度であつた。

「カスチグリオン」の戰後、「リボリー」の戰の前であつた、渠の軍不利にして其の時の士氣は痛く沮喪し危機漸く迫つてきた、「ナポレオン」は